

古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

第二部

第Ⅴ章 弥生時代の倭国

「蝶の雑記帳 130-5」

いよいよ第二部に入り、
4つの時代、弥生時代・古墳時代・600年代初頭・600年代
に分けて、時代ごとに倭国の具体的な歴史に切り込みます。
各章のほとんど各節ごとに、多くの人が初めて聞くような論点か
ら、新しい論証を提示します。

この第Ⅴ章は、いわゆる“邪馬台国論争”をふっとばし、
目から鱗を取り除いて、新しい視界を開くでしょう。

第Ⅴ章 弥生時代の倭国	111
i. 『後漢書』が記述する倭国	111
ii. 『三国志』が記述する倭国	115
iii. 「太陽の道」の視点からの検証	137
iv. 弥生時代の列島西部の概観	158

第二部

国家という装置は、社会の内部に元々あるのではなく、社会の
進化がかなり進んだ段階で作り出される

—— H. オルテガ、『大衆の反逆』

第一部で、この第二部で具体的な歴史事象を認識し考察するための問題空間をなんとかつくりだしたつもりである。しかし、それだけでは十分ではないように思う。T. クーンのいうパラダイムが研究の進展に重しとなるのは、それを批判する側に方法の有効さが足りない場合があるからである。たとえば、弥生時代の倭国がどこにあったかについて、ずいぶん以前に近畿説と九州説との対立があった。その後、近畿説の流れをくむ主流の日本古代史パラダイムに対して古田武彦の批判⁽⁴⁰⁾がなされたが、議論はかみ合わないままの状態である。原因は相手の主張をただ斥けるという対応をするからでもあるが、批判の側にも方法そのものへの鋭い切り込みが足りないところがあるのかもしれない。気をつけたつもりなのわたしの議論にも足りないところがあったのではないかと最近思うようになった。

唐古鍵遺跡^{まきむく}と纏向遺跡^{あんどんやま}および行燈山古墳と渋谷向山古墳から二至二分の日の出がどの山から昇るかを作図していて、気づくところがあった。互いのアプローチに耳を傾けてどちらに理があるかを綿密に検討することが足りなかった、と。奈良盆地の王統がずっと古くから日本列島西部を支配したとする『日本書紀』の主張に根拠はないが、『日本書紀』を編修した時期には正統性の条件が成立していた。これを客観的に判断すれば、奈良盆地の王統は民族的な地域共同体から出発したのだろうが、歴史の進展のある段階で、西日本全域を支配下に置くようになったのである。言い換えれば、最初は日本列島西部に自立的な地域がいくつもあり、それが政治的・軍事的に競争をして最終的に統合されたと考えるのが順当なのである。時代を追って歴史解釈を進めるとき、一方が他方を圧倒するという極端な見方をやめて、時代ごとに競争の状況を見究めて判断することが必要なのだ。以下の章ではそういう考え方をして論述しよう。

第V章 弥生時代の倭国

倭人と倭国ということばは、それぞれ中国の史書『漢書』と『後漢書』とで初めて登場する。本書は倭国の歴史を掘り起こそうとするのだから、その二つの歴史書から説き起こすのが正しい方法である。

『漢書』「地理志」の燕地^{えん}について記述したところに、「倭人」の文字が初めて登場する。燕とは中国東北部を指し、そこから近い北方・東方の情報を得やすいので、倭の情報がその燕地の項で記述されているのである（『漢書』以後の史書では、東方の人々を夷人^いと呼んで「列伝」で記述されるようになる）。倭人について『漢書』「地理志」が記すのは、「楽浪海中倭人有り、分かれて百余国をなす、歳時^{さいじ}をもって来たり^{けんけん}見す、と云う」という伝聞である。楽浪とは漢の武帝が BC108 年に朝鮮半島北西部と北側に置いた四つの郡の一つで最も南側の郡の名で、中国の歴代の王朝は楽浪郡を 300 年初期までほぼ維持した。この短い文は、大陸人が「倭人」と呼ぶ人々が楽浪郡の先の海域に暮らしていて、国が百余りある。ときどき中国の王朝に献上物をもってやってくる」という情報だけを告げている。その倭人がどんな人々かどのような歴史を繰り広げたかを知ることが、われわれの目的である。

i. 『後漢書』が記述する倭国

『後漢書』についてはすでに触れたが、第IV章第 i 節で、「漢が朝鮮半島北半に行政区を設置したおおよそ BC100 年ころ 100 ぐらいあった小規模な部族的社会が、AD 1 世紀ころにはわずかながら発展して中心国の王に金印を授けることができるほどの部族社会の連合を構成していた、と解釈した。

注意すべきことは、『後漢書』が、200 年代後半に編修された『三国志』よりもあとの 430 年ころ、南朝宋代の人^{はんよう}范曄 (398~446 年) によって編修されたことである。後漢の政府で記録された原資料から倭国に

金印を授けたという貴重な情報を取り出してわれわれに伝えてくれた。ところが范曄は、150 年前に編まれた魏の時代のことを記述した史書『三国志』も読むことができたので、倭国についての情報を補うために、『三国志』『魏書』に書いてあったことを自分流に要約して引用した。そこで、「大倭王は邪馬臺国にいる」と書き、卑弥呼のいる女王国に行く地理にも言及した。しかしその要約は、元の『三国志』『魏書』の記述と対応させて読めば、あまり正確ではない。

この変更を現行の日本古代史パラダイムは見逃して、『三国志』が卑弥呼の国を「邪馬壹国」と書いているのに『後漢書』の表記「邪馬臺国」を使用している。現在われわれは「邪馬壹国」とする表記をほとんど目にする事ができない。これに対して古田武彦が魏の時代に「邪馬臺国」というのはなかったと論じた⁽⁴⁰⁾。古田は、『三国志』で「臺」という漢字は本来の「^{たかどの}高殿」の意味にふさわしく高貴な建物や場所にしか使われていないことを指摘した。中華帝国からすれば、東夷の倭国にそういう貴字「臺」を用いることはないはずだ、と。『三国志』全体にわたる根気のいる調査によって「壹」を「臺」と誤記した例はないことを確認した。その貴重な研究を無視することは許されない。歴史を学問的に研究する者は、卑弥呼の時代の倭国の中心国を、3 世紀の歴史書『三国志』に書いてあるとおりに「邪馬壹国」と表記しなければならない。

現存する『後漢書』がその点について註記している。現在刊行されている『後漢書』は、唐の時代 676 年（白村江の戦いよりもあと）に、則天武后の息子の皇太子李賢が学者を集めて監修した註釈書である。われわれが見ることのできるその註釈書『後漢書』は、「其の大倭王は邪馬臺国に居る」という本文のすぐうしろに、「案じるに、今の名は邪摩惟、^{なま}音の訛りなり」と註を入れている。

この註について、倭国のことを改めて考察しようとしたわたしは、前著⁽¹⁾で大きな誤りを犯していたことに気づいた。誤りは、『後漢書』の

原文をインターネットの「維基文庫」からダウンロードしたことで生じた。そこには、李賢監修の註が「案じるに、今の名は邪摩堆、音の訛りなり」と書かれていたのである。今回、岩波文庫『魏志倭人伝 他三篇』に載せてある図版を見て、註釈書『後漢書』「李賢註」には、〈邪摩堆〉ではなく〈邪摩惟〉と書かれていたことを知った。落ち着いて考えれば、〈邪馬臺〉に対して「案じるに、今の名は邪摩堆、音の訛りなり」と言うのでは、現代の読みで「臺」と「堆」の音は似ていて、「音のなまり」ということばが宙に浮く。「臺」と「堆」の発音は「tai」（もしくは「dai」）に近く「惟」の発音は「wi」に近いだろうから、「案じるに、今の名は邪摩惟、音の訛りなり」ではじめて、音のちがいがあるけれども音がなまったのだらうという註が意味を結ぶだらう。問題を考えなおさなければならない。一通り論述を進め、倭国がどこにあったかについて本書が最終的な判断を下す第七章で、この問題を総合的に考察しよう。

『後漢書』は、倭国について金印授与のほかには何か教えてくれないだらうか。序説で触れた AD57 年の記事「倭奴国^{みつぎ}貢^{ちやうが}を奉じて朝賀す。使人^{たいふ}自ら大夫と称す、…」をもっと掘り起こしてみよう。見逃していけないのは、「光武帝紀下」の各年の出来事を記したなかに、「(建武中元)二年春正月、…、東夷の倭奴国主 遣使奉獻」と書かれていることである。「列伝」に書かれた「朝賀」ということばは、朝廷で皇帝に拝謁して新年を祝うことを意味する。「光武帝紀」の語「春正月」がそれを裏づける。うしろの使いの人が「大夫」と自称しているという語句も、倭国の使節が実際に後漢の都洛陽^{らくよう}に行ったことを表現していると読みとるべきだろう（後漢の側が使節の身分を中国式の位階で表現しているのか、倭の使節が中国式の位階を準用して名乗ったのか）。倭奴国主が送った使節は、出先機関の楽浪郡に出向いて、さらに都に上がることができた、と考えることができる。遠い国の使者が会見を求めて来たことに喜んだ光武帝が金印を授けるように命じたのだらう。

調べてみる必要がある。『後漢書』『東夷列伝』全部を読んでみよう。
そこに、夫余^{ふよ}という国について次のように書かれている。

— 夫余国^{げんと}は玄菟^{けんむ}(郡)の北千里。南、高句麗と接す…、地方二千里。
…建武中、東夷諸国皆来りて献見す。(建武)二十五年(AD49年)
夫余王使^{つか}を遣わして貢を奉ず、光武(帝)^{あつ}厚く之に答^{むく}え報^{むく}いる。…
永寧元年(120年)、乃^{すなわち}嗣子^し(跡継ぎの子)尉仇台^{けい}を遣わして闕^{けつ}
(天子の宮殿)に詣^{こうけん}で貢^{こうけん}献^{けん}す、天子尉仇台に「印授金彩」^{たま}を賜^{たま}う。
順帝永和元年(136年)、其王来朝京師(都)^{けいし}、…桓帝延熹四年、使^{つか}
を遣わして朝賀貢献す。永康元年、王夫台^{あだ}の将二万余人玄菟(郡)
を寇^{あだ}す、玄菟の太守公孫域之を激破す、斬首千余級… —。

要点の和訳：

— 夫余国は玄菟郡(後漢の行政区)の北方千里にあり、南の高句麗と接している。その国はおおよそ二千里四方の広さである。AD49年に扶余王が使節を送ってきたので天子は厚く報い、120年には跡継ぎの息子が都の宮殿に来て貢物を献上したので印綬金彩を授けた。136年には扶余王自ら都に来た。(その一方で)夫余王の軍2万人が玄菟郡に侵入したので、玄菟郡の太守がこれを撃破した一。

上の文章は、倭国の記述と合わせて考えれば、光武帝劉秀が後漢を再興したら、東夷の諸国がお祝いのために使節を派遣したこと、その後、倭国や夫余国のように重要な人物を後漢の都洛陽にまで派遣して貢物を献上したので金印を授けることがあったことを教える。これは、のちの中国と近隣諸国との外交の先例と見なすことができる。特筆すべきなのは、東夷の諸国のなかで後漢から金印を授かったのは倭国と夫余国だけだということである。夫余国は玄菟郡に攻め寄せるほどの力があつたのだから、倭国はそれに比肩できるほどの国と認定されたことになる。その前の東夷の諸国が後漢再興の祝賀に行ったという文章は、倭国が、陸続きではないけれども極東アジアの政治状況に対応する能力をもち、ほかの諸国と国力において質的なちがいのない段階に達し

ていたこと、その勢力がむしろ夫余国に次ぐほどだったであろうことを教えてくれる。

そのことを知れば、序説で論じたように、金印を授かった国を倭国の中の一つの小地域とする主流の解釈の誤りがあらためて明らかになる。AD1 世紀の倭国は、後漢の玄菟郡を攻めて悩ませる夫余国に比肩できる程度に発展していた、と認識しなければならない。このとき、夫余国の広さが二千里四方という表現は重要な情報を提供している。文章家だと評判の高い編者范曄は、ことばを変えて『三国志』を要約引用するとき、いくつか原文を誤解しているように見えるが、倭国の地理について次のように書く要約文は『三国志』原文から逸脱していない。すなわち、『後漢書』は、「其の大倭王は“邪馬臺国”（李賢註、案：今名邪摩惟、音之訛也）に居り、楽浪郡の徼（境）から、その国（“邪馬臺国”）まで去くのに万二千里、その（“邪馬臺国”の）西北の境界である拘邪韓国に去くのに七千余里」と書く。この文は、楽浪郡からの距離は、倭国に属してその西北界である拘邪韓国まで 7000 里、倭国の中心国“邪馬臺国”まで 12000 里と言っている。つまり倭国は、おおざっぱに北北西の境界から南南東にある“邪馬臺国”まで $12000-7000=5000$ 里の範囲で、海中の島々としてある、と范曄は考えているのである（范曄が読んだ『三国志』の知識を加えて、拘邪韓国→対馬→壱岐→九州本島までの 3000 里の海を除けば、倭国中心部の広がりとは西北から東南までおよそ 2000 里ということになる。夫余国の広がりとおおよそ一致する）。

ii. 『三国志』が記述する倭国

A：伊都国までの行程

それでは続いて、200 年代の倭国を記述する『三国志』の要点を議論していこう。前節 i ですでに前著『倭国はここにあった』⁽¹⁾で言い足り

なかったことに言及を始めているが、以下でも、新しい図を示し、いくつかの新たな論点を加えて論述していこう。

倭国への行路の起点が『後漢書』の「楽浪郡」から『三国志』で「帯方郡」へと変化したのは、後漢末の戦乱の時期に楽浪郡の南側の一部が帯方郡に分割されていたのを、魏が再度征服して楽浪郡・帯方郡を掌握したからである（その作戦は蜀の諸葛亮しよかつりやうの好敵手であった魏の將軍司馬懿しばいが指揮した。司馬懿の孫が魏から皇帝位を禪譲させて次の晋が成立した）。

『三国志』「魏書、烏丸鮮卑東夷伝うがんせんび」をあらためて読めばおろそかにしていたことに気づくことができる。倭国についての概略部分の要点を、日本語で意味が通じるように我流で記す。

(イ)-----

——倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依って国邑を為す。…今使詔を通じる所三十国。（帯方）郡より倭に至るには、海岸をめぐ循り水行して韓国を歴る（これは海路）、（陸行すると）南に行ったり東に行ったりしてその北岸狗邪韓国に到るのに七千余里（韓についての記述「韓は帯方の南に在り、東西は海で限られ、南は倭と接する、方四千里ばかり」を参照すれば、一辺 4000 里の正方形の対角線よりも陸路は長く見積もられている）

(ロ)-----

——始めて一海を度ること千余里で対海国に至る、…居る所は絶島で方四百余里ばかり、…千余戸有り。良田がなく海物を食べて自活する、船に乗って南北に交易する。

——また南に一海を渡ること千余里で一大国に至る、方三百里ばかり、…三千家ばかり有る。やや田地が有るが、田を耕し食うには足りない、ここでもまた南北に交易をする。

——また一海を渡る千余里で末盧国に至る、四千余戸有り、…。

(ハ)-----

→東南に陸行すること五百里、伊都国に到る。…千余戸有り、世々王が有り皆女王国に統属する。帶方郡の使いが往來するときには常に駐まるところである。

→東南、奴国に至るのに百里、…二万余戸有る。

→東行して不弥国に至るのに百里、…千余家有る。

→南、投馬国に至るのに水行二十日、…五万余戸ばかり。

(二)-----

→南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。…七万余戸ばかり。

(ホ)-----

女王国より以北は、その戸数と道の里程を略記することができるが、そのほかの国は遠く離れていて詳らかにすることができない。

(以下) 斯馬国から始まって最後の奴国まで合計 21 の国々の国名だけ列記したあと、そこが女王(国)の境界の尽きる所とされている。

(続いて) その南に狗奴国が有り、男子を王となす、…女王に属さず。

(末尾に) 帶方郡より女王国に至るのに万二千余里。

(へ)-----

ここに、「女王国の東、海を渡る千余里、また国あり、皆倭種…」の段落の末尾に置かれた締めくくりの文を追加しよう。

倭地を参問するに海中の洲島の上に在る、あるいは絶えあるいは連なり、周旋すること五千余里ばかり。

この道行きを読み解くのにことばを添えておこう。倭国に派遣された魏使は、当然船で倭へ向かったのだが、陸路を進んだ一行があった。おそらく騎乗の者もいた陸路の一行は、いわば現代の政治社会学者や文化人類学者のように、行路ぞいの諸国の状況を記録したものと見える。『三国志』「魏書、…東夷伝」の倭の記述は、その雰囲気伝えて

いる。韓の陸路を進んだ一行は韓の諸国の状況も観察したことだろう。「東夷伝」の韓の三国の部分に反映していると考えてよい。

編者陳寿は、「烏丸鮮卑東夷伝」の導入部でこの地域の概観を述べ、東夷の国々を記述したうしろに「評」を加えて、「漢は朝鮮や越などのことを書いたが、魏の世には匈奴が衰えて、烏丸・鮮卑、さらに東夷の、使いが時に通じてきた。この書の記述はこの事情にしたがっている」と註釈して、魏の時代には東北地方と東夷の諸国の情勢を知ることが重要であったことを述べている。

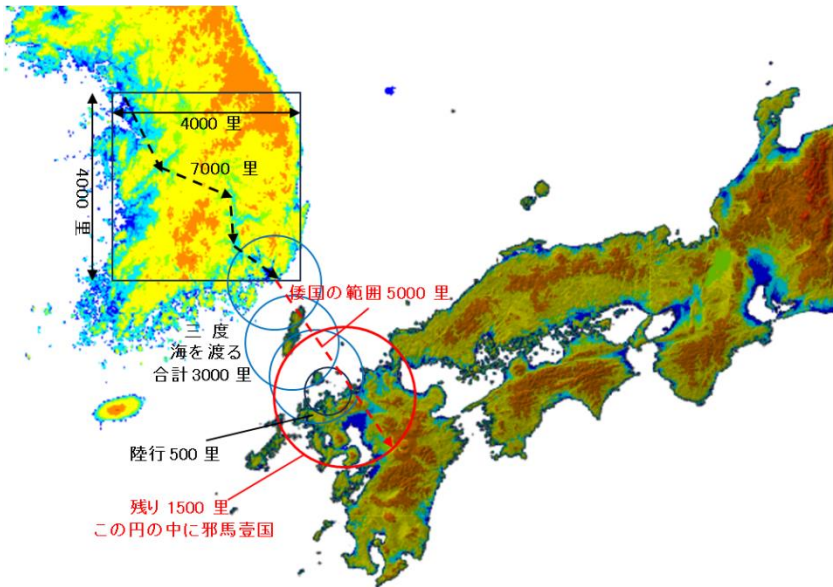
韓国を進んだ一行は「帯方郡から倭国の北岸狗邪韓国に到るのに7000余里」と記しているが、一辺4000里の正方形の対角線の長さ $4000 \times 1.4 \approx 5600$ 里よりも長く、二辺の長さの和8000里よりも小さい。7000里というのは一行が実際に進んだ道の大まかな距離を表現しているだろう（一行は、道案内の人の言う距離を自分たちでも推測確認しそれを集計したのだろう）。あとで示す図V.1では、地形を見て峠道の少ない可能な経路の一つを仮に書き入れている。

上の文で二重下線を引いた部分が倭国の地理を総括する。先に指摘したように『後漢書』は、(イ)と(ホ)がいう「帯方郡から倭国の北岸狗邪韓国に到るのに7000余里、女王国まで12000余里」を要約引用していることが分かる。(へ)の文「倭地の島々を経めぐると5000余里」は、北岸狗邪韓国から女王国までは $12000 - 7000 = 5000$ 余里だという算術式を確認し、島々からなることを言っているのである。ここに、(ロ)の文がいう「三度1000里の海を渡って末盧国に至る」という情報を加えると、九州島内の末盧国から女王国までの距離は $5000 - 3000 = 2000$ 里ということになる。これで、倭国の広がりや女王国の場所とはおよそ決まったようなものである。（海を渡る距離は倭人の情報に拠るだろう。山に登れば向こうの島を見通せて、それを陸地での遠景と比較しておおよそ距離が分かる。水先案内人の倭人は何度も海峡を渡って、どのくらいの距離かを

把握していたはずだ。魏使一行は、それを聞き、自分たちでも航続時間からおおよその距離を推定しただろう。それをおおざっぱに千里と表現して誤りは生じなかったのである）。

ところで、(ハ)の「東南に五百里陸行すると伊都国に到る」と「帶方郡の使いが（船で）往來するときには常に駐^{とど}まる」という文は、地形からしてまぎれの生じようがなく、ほぼすべての論者が同じように読解する。そこは大陸からの渡航者がめざす重要な土地だからそこまで進もう。すると、伊都国から女王国までの距離は残り 1500 里である。

それでは今詰めたことを図V.1 に描こう。この図は一目瞭然倭国がどこにあるかを教えてくれる。女王のいる邪馬壹国は九州島にあるのだ。残る仕事はいわば細部だと思われる。ところが、(ハ)の残りの三つの文と(ニ)の文の読解が“いわゆる邪馬台国論争”を引き起こす。



図V.1 帶方郡から倭国までの距離と倭国の範囲

一つには一里がどれだけの距離か明確でないからである。図V.1は、古田武彦がことばで説いたこと⁽⁴⁰⁾を端的に図示したものであるが、韓半島の東西の海岸のあいだの距離が4000里だから、現代のわれわれは精確な地図でその距離を測って1里がいくらか算出することができる。古田武彦はほかの資料なども調べて1里は70～90mぐらいとした。

(Google mapの韓半島の地図から算出すると、東西の最大距離約290kmに対して1里 $\approx$ 7.2km、京城の南から海岸までの距離約330kmに対して1里 $\approx$ 8.2kmぐらいである。四千里という表現は一桁^{けた}の概数だから、本書では、有効数字が1桁ということを入れて1里は70～80mと表現しておこう)。

ところが、古田の魏晋朝短里説は多勢に無勢で通説の1里 $\approx$ 400mによって封じ込められている。同調して多くの歴史学者と考古学者が、『三国志』「烏丸鮮卑東夷伝」の距離は信用できないとする。また、先ほどの「東南に陸行すること五百里」という表現について、地図を見れば松浦半島から糸島市に行く道は方角が一定せず正しくないとして、『三国志』「烏丸鮮卑東夷伝」は東や南という方角についても信頼できないとする(魏の人は馬鹿にされている)。方角も距離も信用できない文書を読んで地理を理解しようとするれば、勢い論者がそれぞれ自分なりの解釈を提示することになる。こうして、多くの歴史学者と考古学者が五里霧中(出典は『後漢書』「列伝」)で行路に迷っている。

距離や方角について言われていることは本当だろうか。わたしはそうは思わない。Webを見ると、古代中国の距離「里」について多くの論者(土木学会の人まで)がさまざまに論じて1里 $\approx$ 400mだと説いている。それらの議論は「里」の定義にかかわっているが、その思考は距離使用の基本原則を忘れている。距離表現は、ある場所から目的の場所まで行くのに、基準になる長さとの比で表現して、聞き手に伝わるようにするためにある。文章で語られて次々に現われる距離の比が、図V.1のように今日の精確な地図と次々に適合しているとすれば、距離の単位が

どのようなものであれ、距離の数値が記述しようとする里程は成功裏に復元されているのである。論者は、それがなぜか、もしかしたら自分の理解に錯誤があるのではないか、さらに踏み込んで考察しなければならない。

まず、多くの人が頼りにしない(ハ)の「東南に陸行すること五百里」を検討しよう。Google map は距離を測るツールをもっているからそれを使って、松浦半島の北端部呼子あたりを起点に折れ線で海岸沿いに糸島市役所までの距離を測ってみよう。呼子から唐津まで東南に進み→虹の松原を東へ→福岡県との県境から北へ進み→東に折れたのち少しづつ北寄りになる（それは福岡県に入ると山々が海岸近くまで迫っているからである）。けれども、おおよそ東行を続ければ、糸島市役所に到着する。その距離は約 39km だ。それが 500 里なのだから $1 \text{ 里} = 39000/500 \approx 78\text{m}$ である。比較して短い距離についてのこの値は、韓国を方 4000 里とする長い距離から導かれる $1 \text{ 里} \approx 70 \sim 80\text{m}$ という推定に一致する。つまり、『三国志』「烏丸鮮卑東夷伝」は一貫して同一の里単位を用いて地理を記述しているのである。

松浦半島北端部から糸島市への道行きはたしかに折れ曲がっていて、現代の地図を見ると糸島市は松浦半島の北端部の東南ではなくてほぼ東方にある。それでも、松浦半島の北端部から東南方向へ向かえという指示に従えば、地形が限定する道を道なりに海岸沿いに進んで糸島市に到達できる。方角の指示は不十分だが、東夷列伝を簡略に記すという書籍の要請の範囲で、その記述はまずは適格と言える。

こうして、『三国志』の帯方郡から伊都国までの行路の記述は、図 V.1 が明示するように、実際の地理を正確に表現していることが確認できた。ここまで詰めても投了しない人がいるのだろうか。

まだ1里 $\approx$ 70 $\sim$ 80m という推定を拒絶して1里 $\approx$ 400m という通説を信じる人のために以下のことを指摘しよう。『後漢書』の編者^{はんよう}范曄は何の註釈も施さずに『三国志』を引用する。『後漢書』は『三国志』を見て書かれているので、その地理の記述は『三国志』をなぞっているだけかもしれない。しかし『後漢書』は、『三国志』にない「夫余国が印授金彩をもらった」情報を載せている。両書とも夫余国の広さを「方二千里」とするが、『後漢書』には戸数「八万」という情報は書かれていない。范曄と『三国志』の編者^{ちんじゅ}陳寿は別の資料を見た可能性がある。

けれども、そのことは無視して、2000 里四方がどのくらいの広さか（2000 里の距離がどのくらいか）を検証してみよう。1里 $\approx$ 400m としたら 800km 四方と換算できる。一辺 800km の正方形を中国の地図上に置いたらどうなるか。後漢の都洛陽から東へ 800km 行くと黄海の海岸から約 30km 沖合に達する。河北省の石家庄から南へ 800km 行くと長江の南にある蘇州を通る緯度線を越えてしまう。800km 四方は殷代の^{ちゅうげん}中原の広さを超えるだろう。途方もない広さだ。（『後漢書』も『三国志』も、高句麗について「地は方 2000 里」と書く。この情報を加えると、中国東北部の夫余と高句麗は互いに接してそれぞれ戸数八万と戸数三万とされているが、その二つの国だけで中原の二倍になってしまう）。1里 $\approx$ 400m が定義だとすると、『後漢書』と『三国志』はとんでもない記述をしていることになる。

『三国志』と『後漢書』が書く韓の広さ「方 4000 里」は、1里 $\approx$ 400m としたら 1600km 四方となる。こちらがもっとすごいことになるのは明らかである。長安の西方甘肅省の省都^{らんしゅう}蘭州から山東半島の^{ちんたお}青島まで約 1500km、北京から南の^{あもい}厦門と同緯度まで約 1700km。韓の広さが魏呉蜀三国の版図に匹敵することになる。もはや手に負えない。

『三国志』の編者陳寿は魏の次の晋の人である。晋は魏から禪譲によって政府機関をそっくり受け取ったから、『三国志』「魏書」の原資料

となる文書類は晋政府の役所にそろっていた。1里 $\approx$ 400mの定義が常識だったのなら、大部の書籍『三国志』を著すほどの知識人陳寿が上のような途方もない距離をその著作に書くはずがない。そもそも、魏と晋の時代に、楽浪郡や帯方郡などから東夷の諸国について上がってくる報告文書に常識に反する記述があれば、文の国の中央官庁の官僚が見逃すはずがない。

われわれは常識人として、『後漢書』と『三国志』に関し学者のいう1里 $\approx$ 400mだとする通説を、放棄せざるをえない。

議論はこれで終わらない。くりかえせば、宋代の人范曄は、後漢の時代の資料を読み『三国志』も読んだとき、また、「夫余国の地は方2000里、韓の広さは方4000里」などと筆記するとき、1里 $\approx$ 400mが常識だったなら、そこに記されている距離の途方もなさに気づかなかっただろうか。范曄の距離についての常識は宋代のものだから、范曄は、魏・晋の時代の文書を読んでも、同時代の宋の人との会話との違和感をもたなかったのではないか。

「里」単位の継承を箇条書きにすれば、A：晋の時代の陳寿が著した『三国志』『魏書』は、晋の時代にも魏と同じ「里」単位が使用されたことを証言している。B：『後漢書』は、禅譲によって東晋の政府を奪った宋の時代の范曄によって編まれたが、編者范曄が魏晋の時代の『三国志』の里単位に違和感を抱かなかったように書かれ、宋でも魏・晋と同じ「里」単位が使用されたと証言している。これから、魏→晋および東晋→宋と続く時代、距離の単位は同じものだっただろう、という考えに導かれる。

そのことを南朝の歴代の史書で当たっておこう。『宋書』の編者は次々代の梁^{りよう しんやく}の沈約である。「列伝第五十七」の冒頭には、「南夷や西南夷はたいてい(ヴェトナム中部の)交州の南および西南の大海中洲^{あい}上におり、相去ることあるいは

三五千里、遠き者は二三万里、船に乗り帆を挙げて来るので、道里をつまびらかに知ることはできない。外国諸夷は里数を言うけれども、確実な真実ではないだろう」と注意書きを添えて客観的に考えようとしている。東夷・南夷ともに宋代の出来事しか書かず、それぞれの国への里程は書かれない。同じ梁代の編者が著した宋の次の斉のことを書いた『南齊書』『列伝第三十九 蛮 東南夷』を見ると、「南夷の林邑国は、交州の南にあり、海を 3000 里行く」と書いてある。交州はヴェトナム北部、林邑国は交州の南に接してヴェトナム中部にあった国を指すらしい。両地域には漢の武帝のころ郡が置かれ、北部の交州は、林邑国が独立したあともずっと南朝の支配下にあった。距離はかなり正確に知られていたはずである。もし 1 里 $\approx$ 400m だとしたら、林邑国へは 1200km も進むことになって、交州の中心部ハノイからヴェトナム南部のホーチミン市に達してしまう。1 里 $\approx$ 70m 程度なら交州の境から林邑国の中心部まで 210km ぐらいで、地理に適合するだろう。

沈約が『宋書』を編修した梁の時代にどういう里単位を使っていたかを『梁書』で見てみよう。『梁書』は唐の時代に編まれたが、下記のように原資料の距離を変更したとは思われない。「列伝諸蛮」には、「扶南国は去 日南を去る七千里ばかり」とある。日南とは漢の武帝がヴェトナム中部に置いた郡の名で、扶南はメコン川下流にあった国である。7000 里は 1 里 $\approx$ 400m だと 2800km にもなる。それが誇大なことは東南アジアの地図を開けば明らかである。1 里 $\approx$ 400m ではなく 1 里 $\approx$ 70 $\sim$ 80m としなければならない。ちなみに、この「列伝諸蛮」には倭が出てきて（倭王武に征東將軍の号を与えたと書かれている）、「倭は、帯方を去る万二千里」と記され、倭国の地理について『三国志』と同じ認識を示している。『梁書』『列伝諸蛮』の文脈では、7000 里や 12000 里は現実的な距離を表わしているのである。それが一部の日本の歴史家や考古学者に荒唐無稽に見えるのは、1 里 $\approx$ 400m と前提するからである。その前提の根拠は歴史書にない。南朝最後の史書『陳書』には近隣諸国を記述する列伝はないが、『陳書』もまた『梁書』の編者によって編修されたことを言い添えよう。

以上の考察によって、魏・晋と東晋・宋・齊・梁・陳の時代、1里≈400m などという距離単位はなく、同一の里単位「1里≈70～80m」が使われていた、という結論に導かれる（『後漢書』からすると、魏の前の後漢でも同じ里単位が使われたのかもしれない）。禪讓という政權奪取の方式がそうさせた、と言うことができる。政府をまるごと受けとることは制度を引き継ぐことである。制度のなかでも、距離や度量衡の単位は人々の生活になじんでいて変更するメリットはなかっただろう。

距離の単位「里」の長さを変更されたのは、北方から侵入した異民族が建てた北朝での出来事という可能性が高い。北朝の時代に異なる里単位が使用されたことを、第七章で見よう。

以上の考察は、日本の歴史家と考古学者が『三国志』の行路記事の方角と里程を自由に解釈して論を立てることに重大な疑問を突きつける。『三国志』「魏書倭人伝」は信頼できないとして、その書物の記述する倭国と中心国「邪馬壹国」が日本列島のどこにあったかを論じることは不可能である。だから本書は、健全な常識に則り^{のつ}1里≈70～80m という推定にもとづいて、邪馬壹国がどこにあったかを探求しよう。

B：伊都国・奴国・不弥国・邪馬壹国の地理関係

方法を確立するために長い考察が必要だった。いよいよ、(ハ)の四行の文と(ニ)の文の読解に進もう。

伊都国に続く文の構文

伊都国は、帯方郡の使いが常に駐^{とど}まるところで、千余戸。

→東南、奴国に至るのに百里、…二万余戸有る。

→東行して不弥国に至るのに百里、…千余家有る。

→南、投馬国に至るのに水行二十日、…五万余戸ばかり。

→南、邪馬壹国に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。

…七万余戸ばかり。

古田武彦⁽⁴⁰⁾が短里説を採ってこの五行の文が記述する五か国の位置関係を提案している。わたしは、伊都国からの道行きを記述する下の四つの文をすべての場合分けのフローチャートにして、最も整合的な論理を選び出して古田と同じ位置関係を得た⁽¹⁾。本書ではその要旨を簡潔に述べよう。伊都国から奴国・不弥国あたりまでの距離は、どんな読み方をするにしても二百里を超えることはない。1 里 $\approx$ 70 $\sim$ 80m だとすれば、二百里は 20km をを超えることはない。地図 I.6 を見ると、唐津湾―博多湾を結ぶ低地から南に 6km も行くと背振山系の山並みにはばまれるから、東南百里や東行百里行っても、方角を大きく誤ることがないと分かる。下の四行の文脈の分析はむずかしくない。

文に導かれるまま、①東南に 100 里 $\approx$ 7 $\sim$ 8km 行くと奴国、②東行して 100 里 $\approx$ 7 $\sim$ 8km 進むと不弥国、③南へ水行 20 日で投馬国、④その南に邪馬壹国がありそこが女王の都、と進んでみよう。地図 I.12 は、① $\rightarrow$ ② $\rightarrow$ と進むと、糸島市の東南部で東の高祖山系と南の背振山系に制約されて、自然に日向峠^{ひなた}を越えて室見川（吉武高木遺跡の南あたり）に出る。しかしそこは、何日も水行できるような場所ではない。すなわち、③の行路はとれないことが分かる。しかも、そのあたりから南側には背振山系がひかえ、戸数何万もの大きな国が占める土地はない。

だから、四行の文はそのまま道なりの行路を示しているのではない。つまりは、① $\rightarrow$ ②と進んでも行き止まりなのだ。だから、①は東南 100 里 $\approx$ 7 $\sim$ 8km 行くと奴国の中心部へ行ける、と言っているにすぎない。だとすると、行路②の起点は伊都国ということだ。奴国の中心部への行路は分かったから、伊都国を出発して②のコースを進むことになる。地形図を見ると、こちらの行路は平坦で、高祖山系北端の山裾がコースを北寄りに押し上げるけれども、ほぼ東行と行うことができる。100 里 $\approx$ 7 $\sim$ 8km 先に進むと大きな博多湾西南部の小さな今津湾に出る。そのあたりが不弥国だろう。ここなら、船に乗って南にあるという大国投馬国

に行くことができるだろう。しかし実際に水行 20 日も行くと、図 V.1 が教える倭国の範囲を超えてしまう。だから、③は魏使一行が進むべき道ではない。そんなことをすれば、魏使はなんのために伊都国に駐在するのか意味不明になってしまう。③は、重要な国である投馬国へ行くにはどうすればよいかの道標なのだ。

すると④は、不弥国の南に邪馬壹国があると言っているのだ。続く文「水行十日・陸行一月」を実行すると、まともや、倭国の範囲を超えてしまい、なんのために伊都国に駐在するのかわけが分からなくなってしまう。この日程「水行十日・陸行一月」は、人を迷わせるほど途中が長いけれども、最初の方にある導入の句「郡より倭に至る」に対応する結句と考えるほかに合理的な理解はできない。実際、邪馬壹国の戸数は「七万戸」と書いたあとに、「女王国より以北は、その戸数と道里を数えて簡略に記載することができるけれども、そのほかはつまびらかにできない」と書いている。ここまで紹介した国々が、戸数と道里を簡略に記載してつまり書き手が紹介したい国々なのである。読み手は、そのあとに続く「そのほかの旁国」まで含めて深読みしては道に迷う。だから、この一連の長い段落の末尾には、今度は距離で、「郡より女王国に至るのに万二千余里」という文が置かれている。編者陳寿は几帳面な人なのだろう、「水行 10 日・陸行 1 月」という日程に加えて、もう一度距離で「12000 里」と念押しをしたのである。

地図 V.1→地図 I.5→地図 I.6 とズームアップして、倭国の中心部と見なせる地域に伊都国・奴国・不弥国・邪馬壹国の四つの国が浮かび上がった。しかしまだ、おおざっぱな地理関係だけが分かったにすぎない。この構図をもとにさらに『三国志』の記述をとり入れてデッサンを描かなければならない。地図 I.6 を四つのピースに分けてジグソー・パズルをつくるのに似て、各ピースがそれぞれの国の戸数や特徴を適切に

体現するように切り分けることが課題となる。ところが、対海国と一大国では広さが書かれているのに中心部の四か国については広さが記述されていないせいで、課題を正確に解決することが困難となる。ここでは最も蓋然性の高いシナリオを考えてみよう。

最初の伊都国はどういう性格の国だろうか。それを読み解くことが全体を理解する糸口となる。性格づけの文を引用すると、——①「世々王あるも、皆女王国に統属す。郡使の往来常に駐^{とど}まる所なり」、②「女王国より以北には、特に一大率^{そつ}を置き、諸国を檢察せしむ。諸国これを畏^{いたん}憚す。常に伊都国に治す」（岩波文庫の読み）——とある。これと関係するが、②の文の前には、③「租賦^{そふ}を収^いむ、邸閣あり、国^{いち}国市あり、有^う無^むを交易し、大倭をしてこれを監せしむ」、という文がある。

③は、倭国ではすでに租税・労役などを課していて、地域ごとに市があつて物品を交易していたことを教える。この地域で BC900 年ころ水稻栽培が始まって 1000 年以上経ち、市で交換するほど多種^{いち}の生産物があり、相当に発展した社会に成熟していたと見なすことができる。そして、『三国志』が、弁韓辰韓（合わせて 24 国）のところで、国に鉄を出だし韓や倭がそれを取る（諸市では鉄を貨幣のように用いて売り買いをする）と書いているから、倭国にとってその鉄を仕入れることが重要だっただろう。そのとき、『三国志』が倭地と書く海峡の北岸狗邪韓国は要衝と言える。だから、伊都国に置かれた一大率とは、狗邪韓国までのシーレーンを護る軍隊を意味するととらえてよいだろう。②の「諸国を檢察せしむ」をこのように解釈し、一大率^{いたん}を畏^{いたん}憚する諸国とは、倭に属す末盧国～狗邪韓国というよりも、弁韓や辰韓など韓の諸国のことと解釈することができる。すると、一大率の任務は重要だから、王を置いて統率したと理解できる。ところが、伊都国の戸数は千戸にすぎない。末盧国の四千戸とくらべていかにも少ない。

伊都国を奴国や邪馬壹国のような昔からの共同体と考えるよりも、むしろ、一大率という軍事組織とそれを指揮する王の駐屯する土地と解釈してみよう。この軍事組織には、朝鮮半島での緊急事態に備えて、軍船が配備されていたにちがいない。王とその海兵隊の居場所は港湾にあっただろう。よい港は、山に近くて地面が海岸で急に海に落ち込むような場所にある。唐津湾は糸島市に食い込むような形をしているが、古代にはその入江がもっと東の低地にまで広がっていた。唐津湾に面していくつもの軍船の船溜まりとなる適地は、入り江の北にある可也山（筑紫富士と呼ばれ博多湾の方から見える）の南岸にある。そこなら、西にせり出した陸地が冬の北西からの風波をさえぎる。魏使を乗せてきた大きな船も停泊でき、魏使には宿舎が用意されたとして随員は船に寝泊まりすることができる。軍隊を指揮し魏使をも受け入れる王は可也山の南東部にいたと想定しよう。伊都国と呼ばれている土地はどのような港湾だったはずだ。もちろんこの港湾小都市には、海峡を往来する商船の乗組員と商人、物資を送りだし到着した物資を倭国内へ運搬する人々もいたと考えなければいけない。戸数千戸の大部分はそういう人たちで占められただろう。

今想定した可也山のふもとの伊都国から出発して東南へ百里行こう。Google mapを見ると、そこには“伊都国歴史博物館”がある！ でも、そこに伊都国の王がいたと考えてはいけない、『三国志』は「東南に100里行くと奴国」と明言しているのだから。その北西一帯に第I章で考えた三雲南小路遺跡や細石神社や平原遺跡がある。そのあたりはまぎれもなく弥生時代に発展した共同体の中心域で、『三国志』が記述する伊都国とは異なる性格の国である。ところが、奴国の戸数は2万と書かれている。その戸数は現代の糸島市の人口に匹敵するか上回るだろう。奴国は古代にしては大国だと考えなければいけない（同時代の高句麗の戸数は3万）。上で考えたように伊都国は王と一大率が駐屯する土

地とすれば、奴国は糸島の全域（現在の福岡市西区の西端部を含む筑紫国の怡土・志摩郡）を指し、奴国の一角が一大率を置く伊都国のために割かれたと考えればつじつまが合うだろう。それでも、戸数 2 万あったとするのはむずかしいかもしれない。あとでもう一度考えよう。

魏使一行が駐在する伊都国を出立して 100 里 $\approx$ 7km あまり東行すると今津湾に出て、そこの不弥国から投馬国へ船で行く港があるというのが本書の読解である。高祖山系から北に伸びた山裾が今津湾まで達するところがあり（図 I.6 参照）、その自然地形は、そこが奴国と不弥国の境界と示唆する。そこから生の松原を過ぎた今津湾の東岸に少し北に突き出たわずかに標高のある土地がある。西側に現在ヨット・ハーバーがあって広くはないが船溜まりになっている。その東側室見川の左岸河口は姪浜と呼ばれ小山がある。現在北に漁港があるが、昔の小さい船はこの小山の影に係留されたのかもしれない。室見川の河口から東の海岸一帯には百道浜^{ももち}という地名が残っている。この一帯から船に乗って各地に行けるという意味なのかもしれない。古代にはその海岸から東へ砂州が伸びて西公園まで達し、砂州の南側はかなり広い入り江になっていた（次章の地図 VI.7 で鴻臚館と記入されたところの西側一帯）。大濠公園はその入り江の名残である。入り江は鴻臚館が発掘された福岡城の北側まであった。今の海岸は西公園に近づいているが、まだ西公園南の入り江に福岡で一番大きい魚市場がある。もし不弥国を西公園の小山まで延長してよいなら、その南側の山影が冬の風波をさえぎる博多湾で最良の港である。ここでは仮にそうしておこう。

不弥国の戸数は千戸で、末盧国の四千戸とくらべて少ない。それでも、田畑に向かない生の松原から西公園までの海岸一帯だけでは千戸の人口を支えることはできない。北の能古島や志賀島を不弥国に加える必要があるだろう。志賀島には海神社^{わたつみ}があり海人の集団安曇^{あづみ}氏の本拠地とも考えられるから、不弥国は海運と漁業の土地という性格をもつ

ていたことになる。地理について補足すれば、志賀島は博多湾の湾口にあり海路の要地である。生の松原から西公園までの海岸一帯はその南に広がる福岡平野の外郭をなす（それより東側は海岸が博多駅近くまで達していた）。元寇のときの主要な防塁は生の松原から西公園までの海岸一帯に築かれたことが参考になるだろう。

不弥国をこのようにとらえれば、その南には福岡市の平野が広がっていて、その平野に邪馬壹国があることになる。伊都国まで来れば、『三国志』「東夷伝」の原資料の筆者が書くような道順であっさりと邪馬壹国に到着するのである。原資料の筆者と思われる魏の使者にとって、いつも船を停泊させる伊都国まで来れば、迷うこともなく容易に邪馬壹国に行けるということである。

こうして、ジグソー・パズルの切り分けはほぼ成功した。しかし、邪馬壹国の戸数 7 万というのは、^{げんと}玄菟郡を襲撃するほどの強国夫余国の戸数 8 万に近い。福岡平野では面積が足りないだろう。福岡平野の南、^{みずき}後世水城が築かれた漏斗状になったところから入って細長い土地を越えて行けば筑後平野につながる（地形図 I.6 と VI.7 を参照）。その筑後川流域の平野をとりこめば、邪馬壹国の戸数が 7 万に増えるだろう。人口の増加は、つまりは耕作地の拡大による国土の広がりである。

邪馬壹国でそのような耕作地の拡大・国土の広がりがあったとすれば、奴国の方でも似た動きがあったと考えた方がよいだろう。ただ奴国は東側の高祖山系と南側の背振山系とで限られている。戸数 2 万が国土の広がりを表現しているとすれば、背振山系の南の佐賀平野へでも出て行ったと想定するのがよいかもしれない。ただし、これは頭のなかで考えるシナリオだから言えることである。奴国と邪馬壹国のピースの南側をどのぐらい膨らませればよいか定かでない。ジグソー・パズルの切り分けはこのへんで切り上げよう。

上で考えたシナリオは誤りを含むことだろう。それでも、伊都国・奴国・不弥国・邪馬壹国の地理関係の骨組みは正しいとわたしは考える。1里 $\approx$ 400m という現実的に根拠のない前提を取り払えば、『三国志』「倭人伝」の記述とよく調和して、四つの国の性格づけを含むはるかに整合的な理解に到達できるのである。その理解は、四つの国の戸数のちがいまで説明可能にする。

C：検討

福岡と糸島の地域で、水稻栽培を始めた板付遺跡の環濠集落のような共同体がいくつも融合しながらまわりを取りこみ、1000年もの長い年月をかけてそこまで成長した、と考えることができる。その結果、『後漢書』が書くように相当に成熟して光武帝から金印をもらう社会状態に至り、国王印もらった首長の権威を強めて、さらに『三国志』が書くほどの政治体制がととのえられるようになった、と解釈できる。

その過程で、『三国志』が記すような戦争があってもおかしくない。七八十年乱れたと書いているが、その直前の註に『魏略』を引いて「その俗、正歳四節を知らず、ただ春耕秋收を計って年紀となす」とするから、第Ⅰ章で考えたように冬至-春分-夏至と夏至-秋分-冬至とを別々に1年と数えたと見なして、三四十一年ぐらゐの混乱だったと解釈しよう。戦闘があつたとしても、相手の共同体を打ち壊すほどの共同体間の戦争ではなく、王家につながる有力者たちの王権の奪い合いというようなものだった、とわたしには思われる。「共立して一女子を王となした」という記述がこの解釈を支持する（夫余と高句麗のところにも共立して王を立てたという記述がある。王の擁立は王家の専権事項ではなくまだ有力者の支持が必要な社会だったのだろう）。卑弥呼の次も女王だったことは、もっとあとの時代だが第Ⅱ章で見た新羅で最初の女性王善徳の次も女性王だった事情に通じるだろう。王の権力が増して王位争奪が政治（戦争は政治に含まれる）状況を不安定にしたということだろう。『日本書

紀』も、奈良盆地の王権で最初の女性王推古の時代、兄弟のあいだで王位継承の暗闘があったことを記している（推古王は異母兄 30 代敏達王の妻となって子もなしていたが、推古王の同母兄 31 代用明王が短命で亡くなるころ、王位継承権のある一人の異母兄弟は殺され、王位に就いたもう一人の異母兄弟 32 代崇俊王も外戚蘇我氏に殺された。推古が 33 代王に就いたのは混乱を收拾させるためだった）。卑弥呼を王に共立したのもそういう混乱を鎮めるための対応策だった、ととらえてよいだろう。

話がわき道にそれたが、近接する邪馬壹国（戸数 7 万）・奴国（戸数 2 万）・伊都国・不弥国は、第IV章で考えた古代社会のモデルで表現すれば血縁地縁のからみ合った部族社会の連合で、王家の一族および王家と婚姻関係で結ばれた有力氏族たちが政治的な力をもっており、その上に推戴された王がいた、ととらえるのがよいだろう。『日本書紀』が記述する奈良盆地の政治体質はそういうものだったと読みとれる。古代ギリシアの都市国家アテナイは四つの部族から構成されていた。卑弥呼の時代の邪馬壹国と奴国を独立な共同体と考えるよりも、すでにおおよそ統合されて関係の深い連合部族となっていたと見なす方がよいように思う。そうすれば、一大率とそれを率いる王（中国で皇帝の子が王の称号を授与されて領国をもらったように、おそらく王家の一族の者）のいる伊都国が、奴国と接近してあることを理解しやすい。

『三国志』が書く倭の諸国の戸数をすんなりと了解することはむずかしい。邪馬壹国と奴国の戸数 7 万+2 万と投馬国の 5 万で 14 万に達する。これに、戸数の書かれた対海国～末盧国の 8 千戸と、戸数の書かれていない 21 か国の分を加えなければいけない。さらに女王国の南には交戦状態にある狗奴国があり、そこには王がいる。帯方郡から魏の詔書と軍旗を携えた“軍事顧問”の派遣を必要とするほどの大国と見える。これらを合計すると、九州島の戸数は 20 万ぐらいにはなりそうだ。他方、韓国の記述を見ると、馬韓が 50 余国の総てを合わせると 10 万余

戸とされ、弁韓 12 か国と辰韓 12 か国の総てで四五万戸とされている。弁韓・辰韓の四五万戸は、邪馬壹国と奴国を中核とする九州北部の連合体十数万戸の半分程度ということになり、弁韓・辰韓の海峡に近い諸国が伊都国に置かれた倭国の一大率を畏れることがうなずける。

ところで、現代の地図を見ると九州島よりも広い古代韓国で合計 15 万戸ぐらいなのに対し、九州島の総戸数がおおよそ 20 万戸だとすると、九州島の方が人口密度が高いことになる。これは、朝鮮半島南部と日本列島西部との農業の差によるのかもしれない。『三国志』は、馬韓のところで「稲」について触れないのに、弁韓・辰韓のところで「五穀及び稲の種をまく」と書く。そして、倭のところでは「禾稻^{かとう}の種をまく」と書く。この記述の差は、第Ⅱ章で議論したこと、つまり、帯方郡に近い馬韓では稲作があったとしても目立たない程度であり、弁韓・辰韓ではアワやキビなどの五穀に加えて条件の適したところでは稲も栽培しているという見方を支持している、と解釈できる。そして倭のところの「禾稻」は、もっぱらイネ科の稲を栽培しているとする観察である可能性が高い。

倭の人口密度の高さは、韓で行なわれていたキビやアワなどの畑作中心の農業よりも、集約度の高い水稲栽培のせいであると解釈してよいだろうか。ともかく、『三国志』の記述する倭国の朝鮮半島南岸に対する優勢は、水田稲作を基盤とする相当に発展した農業に負っていたとする理解は成り立つだろう。『日本書紀』の記述を信じれば、300 年代にも倭の優位は続いたように見える。400 年ころの高句麗の好太王碑が、朝鮮半島に來た倭軍のことを記してそれを支持することは第Ⅵ章で論じよう。

まだ議論すべきことがあると思うが話題を転じよう。その課題とは、上で書きつけたシナリオを現行の古代史パラダイムと対比して、どちらに理があるかを考察することである。

1世紀～6世紀の中国史書の使用する距離表現を『三国志』にも適用して、その記述どおりに唐津湾東岸にあったはずの魏の船の停泊地伊都国から東南7.5kmぐらい行くと、不思議なことに現在“伊都国”歴史博物館がある。ところが、そのあたりは三雲南小路遺跡や平原遺跡など糸島地域の弥生遺跡が集中している場所である。遺跡群と出土物は、この地域が戸数千戸の小さな共同体などではなかったことを証言している。それなのにそこを伊都国としてしまうと、奴国を割り当てるのにほかの場所を探すほかない。主流の歴史家と考古学者は、奴国の中心部を春日市の弥生遺跡の集中している須玖岡本の丘一帯とする。そういうわけで、“奴国の丘”歴史資料館というのがあるその場所は、魏の船が停泊する唐津湾東岸の港湾小都市から直線距離で約25km離れている。

『三国志』は末盧国から伊都国までの道なりの距離約39kmを五百里と書いているので、こちらの直線距離約25kmを $500 \times (25/39)$ と計算して里に換算すると三百里余りとなる。“奴国の丘”を春日市にもってきた人たちは、『三国志』はそれを1/3に短縮して百里と書いたと考えなければならなくなる。乱暴な考え方をしているのは誰だろうか。方角は、「港」を出発してほぼ東へ向かい、そのあと少しずつ南寄りに行くけれども、須玖岡本はその「港」のおおよそ東方にある。だから、現在公認されている“伊都国”の博物館と“奴国”の資料館は、『三国志』の言っている方角と距離を無視してそこに置かれたのである。

伊都国と奴国の場所をこのように恣意的に選定すると、不弥国をどこにするか場所決めがむずかしくなる。語呂合わせで福岡県糟屋郡^{かすや}宇美町（宝満山・大城山の北側）とされたりするが、原田大六が『平原弥生遺跡』⁽⁴²⁾で挙げた平地が広くて遺跡の多い福岡県飯塚市あたりが有力とされている。ここが不弥国とすると、“奴国”と見立てる春日市須玖岡本から方角は東北に当たり、山越えの直線距離で約24kmあるから、末盧国から伊都国までの道なりの距離約39kmを五百里とするのと

同じ比率で表現するなら三百里をだいたい超えるだろう。ここでも、不弥国を飯塚市にもってくる人たちは、『三国志』は 1/3 に短縮して百里と書いたと考えなければならない。内陸のそこから南にあるという投馬国へ水行できない。船に乗るには九州東岸まで行けばよいとでも考えるほかない。

『三国志』を無視することを続けて、南にではなく東へ向きを変えて瀬戸内海を水行 20 日も行けば大阪湾に達し、上陸して大和川をさかのぼれば奈良盆地に入ることができ、そこが卑弥呼のいる邪馬壹国だ…、現在多数派となっている女王国近畿説はこんなふうに考えるのだろう。しかしその読み換えは、『三国志』が「女王国まではその戸数と道里を数えて簡略に記載することができる」と胸を張って言っていることに反する。魏使の一行は伊都国までの道中で見聞きしたことをあれほど記載してきたのに、倭国の情報としてとても重要なはずの瀬戸内海航行と上陸してから女王国までの行路を記述しないことがありえるだろうか。卑弥呼と会見することについて、初めて行く東の海にある女王国までの行路を報告することが魏使の任務ではなかったのか。

目的の土地がそんなに遠いところなら、なぜ魏使はいつも九州島の玄関口である「港」に駐^{とど}まったのか。駐在所は対象とする地域から遠くないところに置くのが常識ではないか。そんなに遠ければ伊都国は経由地にすぎず、乗ってきた船でそのまま瀬戸内海を進んで大阪湾まで行ったと書かないのはなぜか。奈良盆地の南側に敵対する強国狗奴国を容れる余地がどこにあるのか……。健全な常識人に疑問は尽きない。

こう考えてくると、倭国について上で書いたシナリオが誤りを含むにせよできるだけ『三国志』「倭人伝」の記述に沿うように解釈しようとしているのに対し、“邪馬台国”近畿説は、根本的に、『三国志』が倭国について書くことをみな無視して組み立てられていることが判明

する。そして、『三国志』が書く帯方郡から邪馬壹国までの里程が地図 V.1 上であれほど整合的に再現されることを、思考もせずは無視している。考えてみれば、倭国については、何よりもまず情報源である『三国志』が提示する情報に耳を傾けて分析するのでなくてはいけない。

『三国志』「倭人伝」の記す行路（距離・方角）などを国名以外はみな読み替えて組み立てる理論が、どうして「『三国志』の提示する倭国」の学問的な研究成果と言えるだろうか。科学的方法以前の問題である。理がどちらにあるか明らかである。

iii. 「太陽の道」の視点からの検証

前節 i と ii で論述した『後漢書』と『三国志』の解釈から導かれる倭国像を、第 I 章で提出した「太陽の道」の視点から検証しよう。

前節 i と ii は、倭国の中核となる邪馬壹国・奴国・伊都国・不弥国が地図 I.6 中にあることを示した。そしてわれわれは、奴国の中心部が三雲南小路遺跡のあたりで、邪馬壹国は福岡平野にあると推論した。福岡平野で弥生時代後半期に最も栄えたのは、考古学的に見て春日市須玖岡本を中心とする地域である。その遺跡群から、銅鏡・銅剣・銅矛・銅戈・勾玉…武器の鋳型・銅鐸の鋳型…鉄製品などが豊富に出土している。それらの出土物はその地域が弥生時代の代表的工場地帯だったという観を示す。発見された出土物は絶対年代を必ずしも確定できず、遠く離れた場所とのあいだの確度の高い比較を許さないが、200 年代前半に該当できてここに勝る出土物の出た遺跡群をほかの地域に見出すことは困難だろう。本書は、ここが邪馬壹国の中心部と推定する。

図 I.6 は福岡都市圏と糸島市で弥生時代にあった「太陽の道」を示す図であるが、その太陽の道を構成する弥生遺跡が須玖岡本遺跡・三雲南小路遺跡および吉武高木遺跡であった。これが意味するのは、この太陽の道が、『三国志』の記述する時代に邪馬壹国と奴国を中核とする倭国で認定されていたことを確証する、ということである。最も古い吉武

高木遺跡を中心とする共同体はそこには邪馬壹国に統合化されたと考えるのが順当だろう（奴国に吸収された可能性が排除できないけれども）。

ここで言い添えなければならないのは、人々にこの「太陽の道」の観念を生じさせたのは、ほとんど精確にその緯度線上の東西に宝満山と飯盛山という二つの目立つ山があるという自然条件だったということである。須玖岡本遺跡・吉武高木遺跡から春分・秋分の日には太陽が宝満山と飯盛山から昇り・沈むように見えることは、第Ⅰ章のいくつかの図が示している。その見え方と宝満山と飯盛山にある磐座^{いわくら}がこの二つの山を霊山とする観念を生じさせたのである。第Ⅰ章は、飯盛山が直視できない細石神社と三雲南小路遺跡でもこの春分・秋分の太陽の道を崇拜したことを明らかにした。こちらには高祖山に昇る夏至の日の出を拝む「太陽の道」もあった。以下の議論は、第Ⅰ章で整理した「太陽の道」の要件を補充し、また、前節 i と ii の倭国についての議論を補強するだろう。

A：金印はなぜ志賀島のあの場所から発見されたのか

史書『後漢書』の記す金印がとりたてて特別な島とも思えない志賀島から出土したのはなぜだろうか。これまで納得のいく説明はない。本書は、それが古代人の心性、つまり図 I.6 が示す「太陽の道」という観念から起きたことだと説明しよう。

金印は、1784 年に水田耕作中の農民によって発見された。奉行所を通して福岡藩に届けられ、聞き書きが記録された。その口上書によれば、「一巨石の下に三石周囲して匣^{はこ}の形をした中に存した」という。Wikipedia はその後の経緯を次のように書く。――まず、福岡藩の儒者亀井南冥^{なんめい}が実物を見てそれが『後漢書』の記す金印だと鑑定した。1914 年に考古学者中山平次郎が福岡藩の古記録・各種の資料および現地踏査から出土地を推定し、まもなくその場所に「漢委奴國王金印発光之處」と書いた記念碑が建立された。

その後 1958 年と翌年、考古学者たちによって学術調査が行なわれ、金印出土地は中山の推定地点よりも少し西の西方の海に面したところが適しているとの見解が提出された——と。しかし、Web で見つかる亀井南冥の書き物に描かれた地図は志賀島の南岸を指示している。

発見者の口上書が、出土地点を推定する手がかりを与えている。地理院地図でそのあたりに水田耕作の適地を探すと、現在の金印石碑よりもわずかに西側に水流が描かれていてそちらの方がよさそうだ。現状を撮影した Google map の映像も、そちらの方が棚田の痕跡をとどめている。そこでわたしは、地理院地図の示す水流の上側で標高 29m のあたりに仮想カメラを置いてカシミール 3D に眺望を描かせた。それが図 V.2 である。上側の図は冬至の日の出がどこから昇るかを示し、下側の図は真南を望むと何が見えるかを示す。

図 V.2 はわれわれの視界を一気に開く。ことばに表現すると、上の図は、博多湾の向こうに第 I 章に出てきた重要な若杉山や愛嶽^{おだけ}山などを写し込み、冬至の朝の太陽が宝満山の根元から出てくるように見えることを示し、下の図は、福岡市西部が南の能古島でほとんど隠されるけれども、わずかに飯盛山の頂上は見えることを示している。これを第 I 章で説いた「太陽の道」概念を用いて表現すれば、「金印は霊山宝満山御嶽から昇る朝陽が射し込む場所に埋められた」、しかも「その場所からなら真南にもう一つの霊山飯盛山が見える」ということである。つまり金印が埋められた場所は、変哲もない場所などではなく、この地域の太陽の道を構成する山々を眺望するのに最適で、冬至の日の出を拝む場所としてはおそらく地図 I.6 中で最良の地点なのである。

では金印はどういう事情でそこに埋められたのだろうか。口上書の文「上に巨石が置かれ三つの石が取り囲んでいた」という記述はそれが石棺様の墓であったと推定させる。須玖岡本で明治時代に発見された

「巨石下甕棺墓」では、「長さ 3.6m×幅 2.0m×厚さ 30cm の横石」と側立つ「高さ 1.2m×幅 1.5m×厚さ 40cm の立石」の下を掘ると甕棺が出て、その内外から種々の遺物が出土したという。それに対し、金印の出土状況には甕棺が書かれておらず、三石周囲ということばは甕棺とは異なるやり方だったことを教えるが、それ以上のことは分からない。けれども、それが墓だった蓋然性は高い。

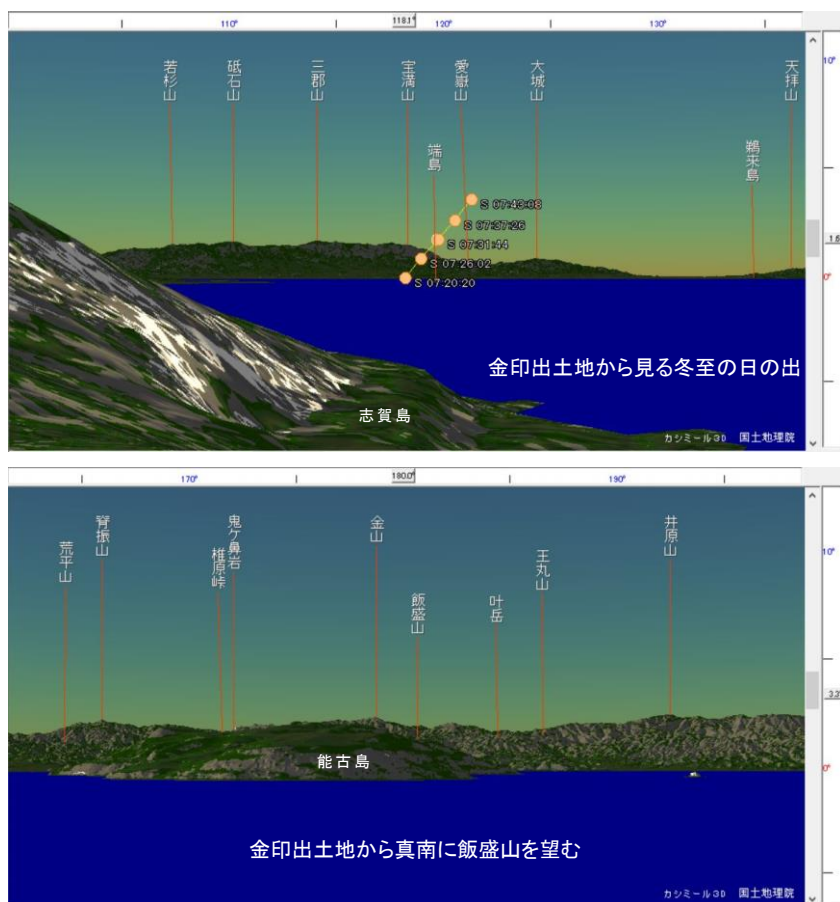


図 V.2 金印出土地から冬至の日の出と真南の飯盛山を望む

すると金印は副葬品である。上の問いは、被葬者がなぜそこに埋葬されたかと言い換えることができる。これに太陽の道の視点を加えると、金印とともに葬られた人は金印をもらった王か継承者で、霊山宝満山から昇る冬至の朝日を拝み、もう一つの霊山飯盛山を見ることのできる場所に埋葬されることを望んだという、有望な回答が得られる。

金印の出土状況がいま一つ明解でないので、金印偽造説があるらしい。「巨石の下に三石周囲して^{はこ}匣の形」のものがすでに水田になっていたところに埋まっていたとは考えにくい。大雨が巨石を覆っていた盛り土が畦を崩したかして、中が見えるようになったのかもしれない。届け出た者が墓をあばいたことをとがめられるのを恐れてあいまいにしたとも考えられる。そうではなく、誰かが偽造したと考えてみよう。しかし、江戸時代のその偽造者は古代に「太陽の道」崇拝があったなどとは知らなかったはずである。偽造説はなぜ金印が志賀島から出たと届けられたかを説明することができない。たとえば学者の亀井南冥が発案者だったとしたら、福岡に大小の古墳があるところが多いのだからもっと真実味を帯びる場所を選んで金印出土地としただろう。閑話休題。偽造説は、金印が『後漢書』記載のものである確証がないことを突く消極的な論法にすぎない。それに対して「太陽の道」の視点は、ほかの論法が出せない有意味な理由を提示する。図V.2は、金印が偽造されたものでないことをむしろ証明している、とわたしは考える。

金印にゆかりの倭王が「冬至の太陽の道」上の島に埋葬されたのは、孤立した事例ではない。第I章で見たように、のちに、朝鮮半島を統一した新羅の文武王は、「太陽の道」崇拝などなければ単に寂しい海辺の岩礁にすぎないところに葬られた。図I.15は、文武王の先々代の善徳女王の時代に王墓群―瞻星台―新羅王宮―善徳女王陵を結ぶ冬至の太陽の道が崇拝されたことを示すが、文武王が死んだとき、以前から寺院が建てられていた吐含山から見て冬至の日の出の方角に位置する岩礁

が選ばれた（石仏寺の建立された吐含山中の場所と冬至の日の出の方向にある岩礁との関連が以前から意識されていたと推定される）。「太陽の道」崇拝が共通することによって、倭王の埋葬地の選定が、のちの新羅の文武王の埋葬地選定の前例となったのである。

こうしてわれわれは、倭王が率先して宝満山と飯盛山を崇める態度を示したことを確認でき、なぜ志賀島のあの場所が金印埋葬地として選ばれたかを説明できた。それは、倭国の人々が地図 I.6 に描かれた太陽の道を現実崇拝していたこと、つまり第 I 章の議論が正しいことを証明している。

B：弥生時代の遺跡から知られる倭国の文明度

第 I 章第 iii 節で、弥生時代の太陽の道を構成する実証的な要素としてとり上げたのは、吉武高木遺跡・三雲南小路遺跡・須玖岡本遺跡であった。弥生時代の倭国がどのような状態にあったかを考えるのにこれらの遺跡について知ることは重要だから、あらためて、Wikipedia から概要を客観的な表現に要約して引用しよう。

吉武高木遺跡：東西最大 700m 面積 $40 \times (100\text{m})^2$ の範囲にわたり各時代の遺跡が点在している。弥生時代には多くの甕棺墓^{かめかん}や木棺墓がつくられた。特に集中している“甕棺ロード”には、距離 450m の範囲に 2000 個以上の甕棺が埋納されていたと推測されている。弥生前期末から後期にわたって営まれたもので、中心は弥生時代中期と推定されている。

なかでも東西 50m × 南北 30m の区域に甕棺墓 7 と木棺墓 4 が集中している。そこから、細形銅剣 9・細形銅矛 1・細形銅戈 1・多鈕細文鏡 1、銅製腕輪 2・勾玉^{まがたま} 4・管玉^{くだたま} 468・ガラス小玉 1 が出土した。第 I 章の太陽の道で注目したのはこの箇所である。最大の甕棺墓の大きさは $4.3\text{m} \times 2.5\text{m}$ 、地表部に $1\text{m} \times 0.7\text{m} \times 0.3\text{m}$ の標石が

あった。最大の木棺墓の墓穴は $4.6\text{m} \times 3.6 \sim 2.6\text{m}$ 。規模はそれより小さい別の木簡墓の副葬品には“王の三種の神器”と見なせる銅鏡・銅製武器・ヒスイ製勾玉が含まれていた。

三雲南小路遺跡：1822年に発見。近年の学術調査で、甕棺2基からなる埋葬主体部と（方形の）周溝をもつ一辺30mの弥生墳丘墓と推定された。甕棺の形式から弥生時代中期中頃と推定されている。西側の周溝に祭祀跡とみられる痕跡があり、東側の高祖山系の山並みとの関連性がうかがえる。これはのちの時代の平原遺跡1号墓（平原弥生古墳）に通じるものと考えられている。

1号甕棺内部に、銅矛2・前漢鏡（27cm～16cm）31面以上・ガラス壁破片8個以上・ガラス勾玉3個・ガラス管玉60個以上・金銅製四葉飾金具8個以上があった。外部から銅剣1・銅戈1・朱入小壺1が見つかった。2号甕棺には、前漢鏡（11cm～6cm）22面以上・ガラス垂飾1・勾玉13個（硬玉製1・ガラス製12）。

須玖岡本遺跡：福岡平野に突き出す春日丘陵北側の低台地上、南北2km×東西1kmの弥生時代中期から後期の大規模遺跡群（墳丘墓・甕棺墓・青銅器鑄造跡の遺跡等）が、まとめて**須玖遺跡群**と呼ばれる。そのうち須玖岡本遺跡は当遺跡群内の北端部に所在する。その中の巨石下甕棺墓は1899年に発見された。1979年と翌年の調査では、須玖岡本遺跡の最も高い場所を中心に、弥生時代中期～後期初頭の116基以上の甕棺墓群、木棺墓、中期後半の祭祀遺構など、あわせて約300基の墓穴が確認された。また、少し低い西側平坦地で9軒の竪穴建物跡が検出され片麻岩製小銅鐸の鋳型が出土した。

巨石下甕棺墓は明治期に発見されたが、その後遺物は散逸していて正確な数は不明である。Wikipediaに書かれている副葬品は、銅剣2・銅矛4・銅戈1・前漢鏡32面以上・ガラス壁2個片以上・ガラス勾玉・ガラス管玉。

これが、弥生時代の倭国の文明度について、九州北部の弥生時代を代表する遺跡が提供する物的な資料である。上の記述に含まれる墓制つまり墓の形状や方角なども形式が分かれば事物的な資料である。それらの事物的証拠に基づいて実証的な解釈をほどこすのが考古学や歴史学の研究であるが、十分な証拠がそろっていることはまれだから、解釈が分かれることになる。

上の Wikipedia の記述は注意深く書かれている。それでも、三雲南小路遺跡のところではそこが伊都国と目されている、須玖岡本遺跡のところではそこを含む須玖遺跡群が奴国の中心地だろうと言われている、と表明される。考古学が断定を下すことはむずかしいからそう表現するのだが、「…されている」と受身形で言うのは判断の責任をあいまいにしながら読む人を一つの方向へ誘導してしまう。本書は、その推測が当の『三国志』の記述に何ら基づいていないことをすでに論証した。

ここでは、上記三つの遺跡の示す文明度をよく見究めれば、これら三つの遺跡のある九州北部に勝るほどの文明度を示す遺跡を、同時代の日本列島西部のほかのところに見出すことがむずかしいことを指摘しよう。ここまで議論してきた中国史書に基づく第一の論拠に加えて、物証に基づくこの大局的な判断は本書の倭国観の第二の根拠となる。奈良盆地の代表的な弥生遺跡である唐古・鍵遺跡を上記三つの弥生遺跡と比較する議論は、次の第iv節で示そう。

第I章のくりかえしになるが、弥生時代の「太陽の道」は、上の三つの弥生遺跡を重要な要素として次のような神話の発展を説明できる。古い吉武高木遺跡では飯盛神社がイザナミを祭神とし東北東の若杉山のふもと、の太祖神社がイザナギを祭神としていたのに対し、須玖岡本遺跡では至近の場所にある熊野神社でイザナギ・イザナミ夫婦神を祀るようになった。それは神話の整理が進んだことを示している。さらに三雲南小路遺跡では、そばの細

石神社に日神の孫ニニギの妃である木の花の咲くや姫が祀られ、夏至の日の出の方向にある高祖山のふもとの高祖神社にその子のヒコホホデミが祀られている。これらの神々は日本神話の主系列の神々であるが、三つの遺跡（および宝満山・飯盛山）を結ぶ「太陽の道」がそれらを関係づけている。

これらの物証は、『日本書紀』の神代に登場する神々が九州生まれであることを証言しているのである。しかも『日本書紀』は、人代の初代王が、その神話の神々を祖先とし神話の生まれた九州から来た、とさえ語る。『日本書紀』が主張する王統の正統性は九州生まれの神話にあることを認めているのである。本書の提起する「太陽の道」概念は以上の脈絡を含んでいる。つまり、上記三つの遺跡とそばの三つの神社を通る太陽の道は、ここが倭という国の発祥の地であるという考えを支持し、本書の倭国観の第三の根拠を付与する。

以上三つの論拠が、「図 I.6 の示す地域が弥生時代の倭国の中心部であり、そこに『三国志』の記述する伊都国・奴国・不弥国・邪馬壹国があった」とする本書の見方を強固にする。さらに考察を進めよう。

C：平原遺跡1号墓はどの方向を指しているか

三雲南小路遺跡のあたりは伊都国ではなく奴国の中心部だったとしさえすれば、考古学者たちの研究は生きてくる。第I章では図中に示すだけで議論しなかった平原遺跡^{ひらばる}をとり上げよう。三雲南小路遺跡から北北西のすぐ近所にある。1965年に発見された平原遺跡については、上の三つの遺跡よりも綿密に調査された報告書があり詳しく知ることができる。最初の発掘調査と考察は指揮した原田大六の豪華本⁽⁴²⁾に集大成され、また、1988年からの再調査について前原市^{まえはる}（現糸島市の前身）の報告集⁽⁴³⁾が1999年に出版されている。

まず、平原遺跡の概要を、前項Bで議論した三遺跡と対比できるように、Wikipediaを要約引用して整理しておこう。

平原遺跡：弥生時代後期から晩期の 5 つの墳丘墓を合わせた名称。

1 号墓は方形周溝墓で、割竹形木棺の埋納が検出されている。周辺に調査範囲を広げて最終的に 5 基の墳丘墓が発見された。1 号墓は墳丘墓として復元管理されている。1 号墓の副葬品の中には日本製と中国製の破碎した銅鏡片が多数あり、これらの破片は 39 面に復元された。この数は 1 つの墳墓から出土した銅鏡の枚数としては日本最多である（2009 年現在）。多数の銅鏡片は「人為的に破碎されたものではない」と原田大六は報告している。

副葬品の内訳は、大型内行花文鏡 5 面（または 4 面）・日本製の直径 46.5cm の超大型内行花文鏡・内行花文鏡 2 面・方格規矩鏡 32 面・四^{みずち}螭文鏡 1 面・メノウ製管玉 12・ガラス製勾玉 3・ガラス丸玉約 500・ガラス小玉約 500・ガラス管玉約 30・ガラス連玉約 900・耳瑠 3 破片・素環頭大刀 1 である。

この説明に記されていない重要なことを、糸島市のホームページが補足している。1 号墓は大きさが 14m×12m の四隅が丸い長方形で、その中央に木棺が埋葬されていた。そこには、この墓は弥生時代終末期（約 1800 年前）に造られたとする見解が書かれている。副葬品に武器がほとんどなく、イヤリングなど女性の装身具とみなせる品が多いことから、1 号墳の被葬者は女性だと考えられているようだ。原田大六は、この被葬者を“日本における最古の女王”と呼んでさらに独特の解釈をほどこしているが省略しよう。

ここでは墓制に注目して考察するので、まず図 V.3 に、二度の発掘現場の写真を示す。左は最初の発掘現場を上空から撮影したもの（西日本新聞）で、右は二度目の再調査の写真（糸島市ホームページ）である。

Wikipedia の記事には、——1 号墓の東南にある直径約 70cm の縦穴を、原田大六は湧水の存在から井戸として報告していた。「前原市報告

書」⁽⁴³⁾は、この縦穴を大柱跡（穴中の土壌成分未調査）とし、墓から見て東南の日向峠^{ひなた}の方角に位置していることを根拠に、この大柱跡は太陽信仰に関係するものとの説を提示している——という記述がある。図V.3 右の写真は復元したその大柱を写している。ここには、あとで触れるが別の二対の柱穴を鳥居跡と見る原田の太陽信仰に関する見解（と被葬者についての独特な解釈）に対して、二度目の調査が少し異なる見方をしていることが述べられている。



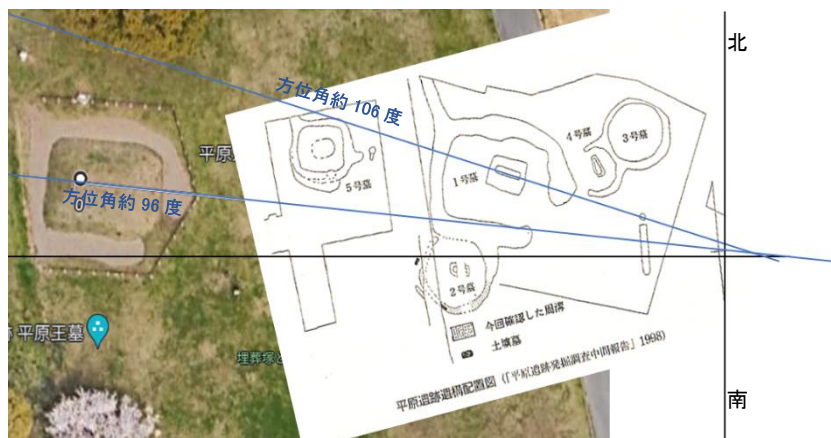
図V.3 平原遺跡1号墓の発掘現場の写真 引用

両者の見解は、平原遺跡1号墓が日向峠の方角を重要視しているという点で一致している。それで、平原遺跡について書かれた文には必ず日向峠の名が登場してその議論がふくらむ。この強調にわたしは前著のときから違和感を抱いた。あらためて図V.3を注視してみよう。左側の写真は、長方形に掘られた割竹形木棺のあった部分を写し込んでいるが、その方角が背景の山並みのうちの日向峠の方を向いていないことが明らかである。また右側の写真も、大柱と日向峠が直線に並ぶように見える場所にカメラが位置していることを示すが、注意深く見れば長方形の堀穴（二本の測量棒）がその直線方向と一致しないことを教える。二つの写真は、割竹形木棺が、考古学者たちが主観的に見ようとしているほど入念に、日向峠の方向に照準を合わせて埋められたので

はないことをむしろ明かしている。そして、左側の写真は、周溝がとり囲む墳丘墓自体が日向峠よりも左寄りに向いていることを教える。

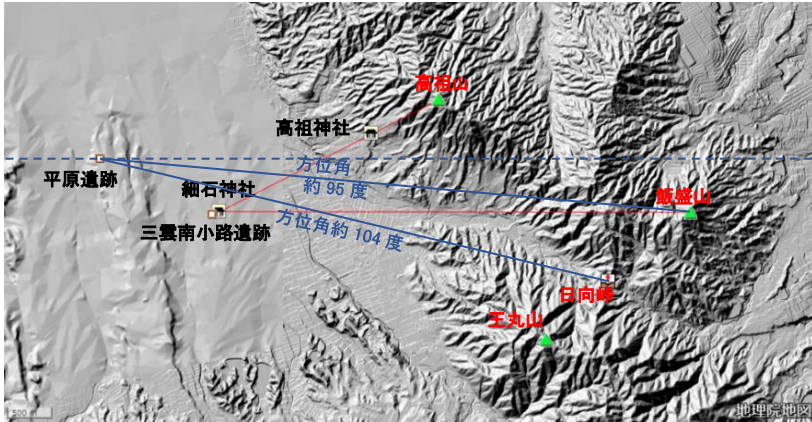
これを図V.4 で確かめよう。この図は、復元された1号墓を上空から写した Google map の地図（上が北）上に、糸島市の Web に載っている発掘図面を重ねたものである。発掘図面は、描かれた磁北（子午線から7度30分西に傾く）を参照して、北が上にくるように回転してある。つまり、この図V.4 は、1号墳の中心軸を青い線で描いて、それが発掘現場図でどの方向に向かっているかを表現している。ただし、ワープロ・ソフト Word のツールで図の回転は1度刻みにしかできない。もともと小さな発掘図面から方角を求めれば誤差が大きいことに注意してほしい。図V.4 に書きこまれた方位角は、北を0度として時計まわりに何度の方角かを表わす。したがって、北の方角を0度として、1号墓の主軸は約96度の方向に向いており、割竹形木棺は約106度の方向に向いていることになる。

図V.4 に表現したことを国土地理院の地形図で確認しようとしたのが図V.5 である。こちらの図V.5 を図V.4 と比較すると、精度上有意



図V.4 平原遺跡で復元された方形周溝墓と発掘調査の遺跡配置

な差異で、割竹形木棺が日向峠の方向よりもわずかに南（右）寄りに向いていることが分かる。それに対し、方形周溝墓全体の主軸は飯盛山の方角に向いている。図V.4 と図V.5 の二つの図面で数値は1度くらい異なるが、大きな距離を縮尺した図V.5 の数値を主と考えると、誤差を含んで95～96度の方角を指していると言ってよいだろう。



図V.5 平原遺跡と高祖山・飯盛山・日向峠・玉丸山の位置関係

現糸島市生まれの原田大六は、平原遺跡の東方に連なる高祖山系からの日の出を太陽信仰と結びつけて論じている。ただ、平原遺跡の位置からでは二至二分の日の太陽は目立つ山からはずれて昇る。原田は、平原遺跡から見て太陽が日向峠から昇ってくるように見える10月20日（カシミール3Dの図は省略する）をのちの宮中行事に結びつけている。春分秋分の日のは、真東より2度ぐらい南（右）側の尾根、地元の人「東の原^{はら}」と呼んでいるところに見える、と書いている（「原」は^{たかまがはら}高天原の「原」だと原田は考えた）。原田の言う「東の原」とは、地図V.5に点線で描かれた東西線より角度で2度ぐらい南側の尾根あたりのことだろう（この前の箇所では原田は高祖山の右手に見える峰を『記・紀』神話に出る「くしふる山」と呼んでいるが、くしふる山については第I章で触れたのでここでは議論しない）。その峰と春分秋分の日朝

日が顔を出す方角の尾根は、高祖山などの峰にくらべて目立つ山とは思えない。原田の思い入れは肯定できかねる。

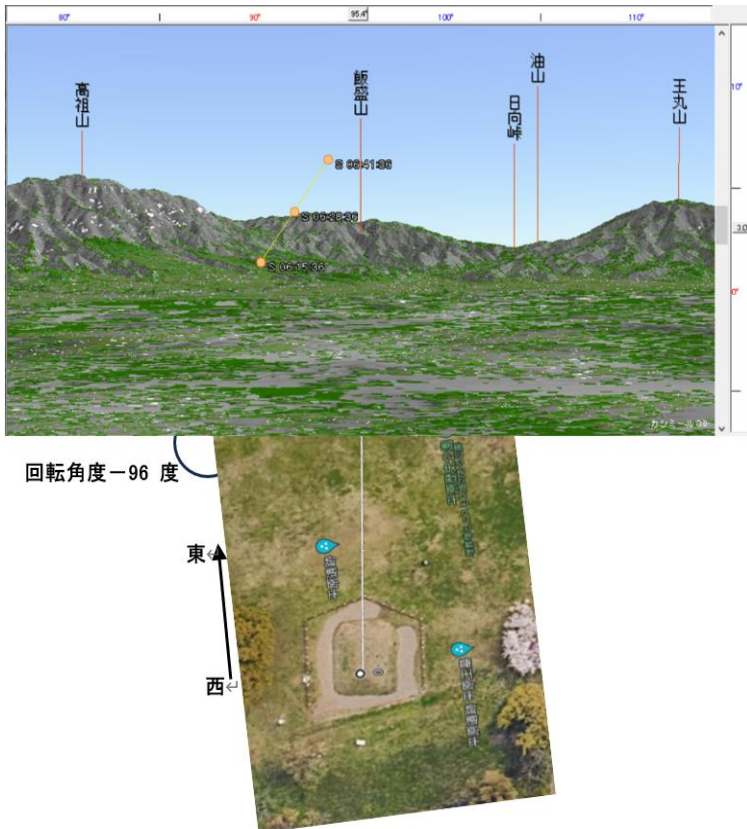
原田大六が平原遺跡を東方の山並みからの日の出と結びつけて解釈するのに苦勞したのは、第Ⅰ章で論じたように、この地域で太陽の道の焦点となる特別の場所がすでに細石神社とそばの三雲南小路遺跡の王墓に先取されているからである。本書は別の見方を提案し、平原遺跡 1 号墳の重要性を述べよう。

図 V.4 は 1 号墳の中心軸を青い線で描いているが、実はその直線は Google map で 1 号墳と飯盛山頂上そばの上宮跡地を結んだ直線で、図 V.4 の 1 号墳の部分は Google map のその図を拡大して得られたものである。すなわち図 V.4 はすでに、1 号方形墳墓が飯盛山方向に向いていることを含んでいるのである。図 V.5 は、図 V.4 が含む誤差を示唆しながら、このことを追認しているのである。

そもそも常識的に考えて、14m×12m もある方形周溝墓を造営するとき、設計者と工事責任者が第一に考慮するのは、周囲の溝と盛り土をどの方角に向けるかだろう。今上で確認できたことは、周囲の溝の長辺 14m は飯盛山に向けて掘られたということである。割竹形木棺がその方角と異なる日向峠の方向に向けて埋められているのは、たしかに意味があったのだろう。たとえば、被葬者は、日向峠の向こう側の室見川流域の飯盛神社かそのふもとの吉武高木あたりに深い縁があった、というような解釈ができるだろう。しかし、遺跡の図面は、割竹形木棺が日向峠へ照準を合わせるほど入念に置かれたのではないと証言する。本書は、埋められた割竹形木棺の方向に深入りすることはやめよう。

問題にすべきなのは、この方形周溝墓はなぜ照準を合わせるように飯盛山に向けて築かれたのかということである。「太陽の道」概念を提起するわれわれは、原田と同じく、平原遺跡から見て太陽が東方の高祖

山系のどこから昇ってくるかに関心がある。ここでも、考察を進めるのにカシミール 3D を用いて高祖山系の眺望を図示するのが有効だろう。図V.4 と図V.5 とを統合してその眺望を表現したのが図V.6 である。図V.6 の上側の図が1号墳に仮想カメラを置いて得られた眺望で、下側は、図V.4 の方形周溝墓の写真を反時計回りに 96 度回転して上側の図中の飯盛山を向くようにしたものである。この図は、明らかに方形周溝墓の主軸が飯盛山に向かっていることを教える。その方角は東西方向よりも約 5 度南寄りである。そのことは、図中に示した東西方向と



図V.6 平原遺跡1号墓は飯盛山の方角に向いている

の角度差が示し、カシミール 3D の眺望図に書き入れられている方位角約 95.4 度からも知られる（数字が小さいのを我慢してください）。

図 V.6 を見ながらもう少し詳細に説明しよう。この図には春分秋分の日の出がどの方向に見えるかも書きこまれている。手前の山並みに隠されて本当は見えない太陽が描かれているが、その左下の太陽は方位角 90 度の下方にあり、水平面上でほぼ真東だということを示している。実際に太陽が出てくるのはその方角よりも右（南）側の山の端である。その方位角は上方の角度目盛りから目測すればおよそ 2 度ぐらいだと分かる。原田大六が平原遺跡から見て春分秋分の太陽は真東から 2 度ぐらい右側から昇ると言っているのは、このことである。原田はその方角を重視したが、図 V.6 は、方形周溝墓がさらに 3 度ぐらいすなわち方位角 95.4 度ぐらいの方向を向いていると証言しているのである。以上の精査によって、平原遺跡 1 号墳は、飯盛山（上宮跡）の方向に向いていると結論することができる。

言い足せば、初回の発掘時の図面には 2 対の穴が書き入れてある。原田はそこに鳥居が立っていたと考え、第一の鳥居は東の原の方角へ、第二の鳥居は高祖山の方角へ向いていたと解釈している。だが、図書館で複写した大きな図面に線を引いて角度を測って見たら、二つの鳥居の向く方位角はそれぞれおよそ 95 度と 87 度程度だった。この見積もりも図 V.4 からの見積もりも誤差は大きい、図 V.6 上部に書きこまれている方位角と照合すると、誤差が大きいことを考慮しても有意に、第一の鳥居は飯盛山の方角へ向いていたと判断することができる。だが、第二の鳥居は高祖山の方角に向いていたのではないようだ。

残るのは、実際にそんな精度で方形墓の主軸を飯盛山に向けることができたかという問いである。この問いはすでに第 I 章で考察してある。太陽の道の焦点にある細石神社の地点はどのようにして見つけれ

れたかという問いに等しい。今回もそのときと同じ計器を用いればよい。まず、墳墓を造成しようとする場所に図V.3 に似た柱を立て、照準棒つきの日時計をもって図V.6 に見える向こうの尾根に登り、尾根を縦走して飯盛山の峰と立てた柱が一直線に見える地点を探し出せばよい。今回は太陽の南中する方角を見出してそれに垂直な東西線を求める必要がないから、持っていく計器は日時計である必要もない。ただ片目をつぶって照準棒で見通して両側の目標が一直線に並ぶ地点を探し出せばよい。そしてその地点にもう一つ柱を立て、目立つように旗をくくりつけばよい。次に、工事現場で、その柱と向こうの柱が一直線に見える地点に短い測量棒を前後に2つ立てれば方向が定まる(図V.3をよく見ると同じように2本の測量棒がある)。尾根で木立を切り倒す作業が必要だろうが、数日でできただろう。尾根と方形墓造営地で眼のよい人が慎重に測量すれば、十分精度よく方向を定めて周溝方形墳をつくることができる。

長い議論になったが、以上の考察によって、高い蓋然性をもって、上で出した「平原遺跡方形周溝墓はそこからは直視できない飯盛山の方向に向いている」という結論が論証された。その理由を、本書のここまでの議論が説明する。飯盛山は東の宝満山と並んで東西線「太陽の道」を指定する霊山だから、王と呼ばれるような人たちがその墓の造営に際し、率先してその霊山を崇拝する姿勢を示したのだ。逆に、平原遺跡と金印出土地の二例はともに、飯盛山を崇拝していたことを証言し、本書の「太陽の道」概念の正しさを確認しているのでもある。

補足すれば、割竹形木棺を用いた方形周溝墓は、細石神社そばの甕棺を用いた三雲南小路遺跡の王墓(一辺30mの墳丘墓)と墓制上の差異を示して、こちらが小さいけれども時代的にあとの墳墓であると考えられている。出土した土器の形式から弥生時代晩期AD200年ころの墓という判断は、おおよそ受け入れてよいのだろう。先ほど原田の考えた

鳥居の解釈に変更を求めたが、墳墓の手前に鳥居があったというアイディアは一考に値する。現代でも天皇陵では、手前に鳥居、次に参拝のための場所、奥に墳墓が築かれる。この形式が、墳丘墓が築かれるようになったところに淵源をもつと考えるのは有効だろう。

D：邪馬壹国の女王卑弥呼はどこにいたか

本書のここまでの議論は、われわれを、邪馬壹国の中心部が春日市の須玖遺跡群の分布域にあったとする推定に導いているが、『三国志』『倭人伝』は、さらに女王卑弥呼の所在に関係して次のような情報を記す。
——共に一女子を立てて王となす^(イ)。名づけて卑弥呼という。鬼道に事^{つか}
え、能く衆を惑わす^(ロ)。年すでに長大なるも、夫婿なく、男弟あり^{たす}、佐
けて国を治む^(ハ)。王となりて以来、見る者少なく、婢千人をもって自ら侍らしむ。ただ男子一人あり飲食を給し、辞を伝え出入す。居所は、宮
室・楼観、城柵^{おごそ}を^{もう}厳かに設け、常に人あり兵を持して守衛す^(ニ)——。

第Ⅰ章の「太陽の道」の議論が上の文の理解を助ける。(ロ)の「鬼道につかえよく衆を惑わす」は魏の人が違和感を抱きながら他国の宗教を記述していて、卑弥呼はアニミズムもしくはシャーマニズムの巫女だったと推定できる。そうすると、(イ)共立されて王となった卑弥呼は、(ロ)宗教にかかわり、(ハ)王家の未婚の女性で、弟が政治を担当した、という記述は、日本や琉球の王家の祭事と政治のあり方によく一致する。すなわち卑弥呼は、太陽神を祀る皇大神宮の「^{さいくう}斎宮」となった天皇家の未婚の女性や、琉球で「聞え大君」となった王家の女性と同様な「巫女」だったにちがいない。本書のことば使いをすれば、卑弥呼は「太陽の道」の祭事を担当する王家の巫女である。ただ異例なのは、政治状況のせいで共立されて同時に王でもあったという点である。日本・琉球列島の事例からして、王家の男性である弟は政治を“補佐”したと推定される。実際は王弟が政治の采配を振るっていたのだろう。

誰もが受け入れるだろうこの理解に基づき、第I章の議論を援用すれば、卑弥呼がどこにいたかの考察を一步進めることができる。再確認すれば、1里を現代の単位で何mと考えるかによらず、図V.1の最後の赤い円に進む前の伊都国までの行路に異論を唱える人はいないだろう（『三国志』が「帯方郡から女王国に至るのに1万2000余里」と「倭地を参問すると…、ぐるっとめぐって5000余里」と書くことを誰も否定することができない。5000里は総里程12000里から韓の行路7000里を差し引いた値で、この算術を否定することもできない）。図V.1の赤い円は、倭地5000里のうち1000里の海を三度渡り伊都国まで500里歩いたのを差し引いたら、残りが1500里になることを表わしている。

この否定できない理路に、第I章第iii節の「太陽の道」の要件を適用すれば、太陽の道を主宰する王であり巫女でもある卑弥呼がどこにいたかがほとんど絞り込まれる。第I章の弥生時代の「太陽の道」の要件は、王が吉武高木遺跡か三雲南小路遺跡か須玖岡本遺跡の近くにいただろうことを強く示唆する。ここに女王卑弥呼が「太陽の道」の巫女でもあるという今の論点を加えれば、この考えはさらに補強される。卑弥呼が行なう祭事は、三つの遺跡そばの神社のうちのどこか一箇所で行なわれた、という考えに導かれる。

ところで、本章の第ii節は、女王卑弥呼が巫女でもあるという今の論点なしに、『三国志』「倭人伝」の記述どおりに進み、図V.1の赤い円内で200年代前半に弥生時代で最も繁栄したところはどこかと尋ねて、それが須玖遺跡群あたりであるとする考古学的な知見によって、邪馬壹国の中心部が須玖遺跡群あたりだとする推定に導いた。そして、「太陽の道」の視点も、巫女である卑弥呼が祭事を行なった場所として須玖岡本遺跡付近とする推定を支持するのである。

以上の考察と議論に従って、本書は、邪馬壹国の女王卑弥呼は須玖岡本遺跡付近で祭事を行なった、と判断を下そう。

すでにここまでの議論で、邪馬壹国が主導する“連合王国”「倭国」が相当に発展した社会であったという見方に傾いているのだが、先ほど下線を引いた部分(二)「居所は、宮室・楼観、城柵を厳かに設け、常に人あり兵を持して守衛す」は、女王の宮が「楼」おそらく二階建ての高殿であり、柵を設けて兵器をもつ兵士が守る城と言えるような構えであったことを証言している。だから、魏の人が女王の宮が建てられた付近を「都」と表現できたのである。先ほど想像した「一大率」のいる港湾小都市伊都国と比較しても、「大倭」がいただろうその都は“ひとまわり大きな都市”と呼べる規模をもっていたと推定できる。

そうすると、中心部に「女王の宮をとり囲む城柵」がある小さな都市は、巫女である卑弥呼が太陽の道の祭事をとりおこなった場所とは少し離れた場所にあったと推測される（須玖岡本遺跡が見つかった丘は低いけれども、地形がそれを要求したと考えられる）。1700年以上年月が経過しているから、今では住宅地になっている春日市で女王がいたその“都の跡”を見つけるのはむずかしいだろう。

さて、『三国志』は「卑弥呼を鬼道に事え」と表現するが、本書の考えでそれは「太陽の道」崇拝のことである。韓のところでも、「鬼神を信じ、国邑は各々一人主を立て天神を祀る、之を天君と名づく。また諸国で、…、大木を立て、鈴や鼓を懸け、鬼神に事え」と書く。この記述は、韓と倭との宗教的な習俗が似ていることを報告しているのだ。実際、第Ⅰ章の第Ⅳ節で新羅にも「太陽の道」があったことを知ったので、この考えは支持される。上の文は、「鈴や鼓を懸け」と祭りの具体相に言及している。倭では鏡が珍重されたことを考古学が教えるので、倭の祭事では鈴や鼓よりも鏡が重んじられたことが知られる。

ところで、そこで使われている漢字「鬼」は化け物や死者の魂を意味し、「鬼神」は怪物・死者の魂・祖先の靈魂を意味する。韓や倭で行な

われていた宗教的な祭事を現代的なことばで表わせば、やはりアニミズムとシャーマニズムということになるだろう。倭の「太陽の道」の祭事で用いられたと推定できる鏡は、太陽神の霊を宿らせる祭具と考えることができる。それだけだとアニミズムの様相が強く感じられるが、巫女は霊を呼び寄せる霊媒の巫女でもあったと考えられる。太陽神にゆかりの霊山宝満山には竈門神社（上宮・中宮・下宮）があり、祭神は「たまよりひめ」である。「たまよりひめ」とは本来「魂の憑依する姫」、すなわち女性の霊媒者という意味だと考えられる。宇佐宮と宗像大社では祭神が日神の娘である三女神とされているが、本来の三女神は巫女だったと考えるのが合理的である。いつのまにかそれがあいまいにされた、とわたしは推測する。この考えを古代ギリシアの事例が後押しする。古代ギリシアでも太陽神アポロンはエーゲ海の島に生まれたとされるが、大きな神殿はデルフォイに造られ、その神殿の巫女が授ける神託はギリシア中で信じられた。アポロン神殿の巫女は太陽神のことばを預かって伝える女性シャーマンだったのだ。東アジアでは男性のシャーマンは巫覡ふげきと呼ばれるが、「太陽の道」を主宰する倭王は巫覡の長という性格をもっていたと考えてよい。

それを魏人が「鬼道」と呼ぶ一因が須玖岡本にはある。本書は、上述の三つの遺跡のあった場所で「太陽の道」の祭事が行なわれたと推定しているが、そこは太陽神の霊を呼び寄せる霊所と考えられたことになる。だから、人々がその霊の宿る場所に葬られることを願ったのだろう。熊野神社のある須玖岡本の丘には、巨石下甕棺墓や今ではドームで覆われた甕棺群があって、亡者のいる墓地と見なすこともできる。魏人は、太陽崇拝の祭事がそういう墓地で行われるのを見て、「鬼道」という文字がふさわしいと思ったのかもしれない。吉野ケ里遺跡で居住地区と墓地が分かれていることは、時代が進んで首長の住居と祭事の場所が離れるようになった事情を表現しているのかもしれない。

何度となく言及している熊野神社は、宝満山と飯盛山を結ぶ「太陽の道」上にあり、須玖岡本の丘で宝満山と飯盛山を礼拝するのに最適の焦点にある。卑弥呼の時代にはすでに祭事のための社があったと推定できるだろう。その境内に熊野神社古墳があるが、いつ造られたのだろうか。現在の熊野神社の本殿はその墳墓の上に立っている。それがわたしに、この古墳は卑弥呼の墓ではないかと想像するように誘う。

ところが『三国志』は、「卑弥呼が死ぬと大いに塚を作り、そのさしわたしが百余歩で、殉葬者の奴婢が百余人」と書く。ここの「歩」という長さの単位がいくらかが問題だが、今それを論じる余力がない。ただ、その記述はかなり大きい墳墓を表現しているように思われ、熊野神社境内の墳墓がそれに該当するとするのはむずかしいかもしれない。しかし、卑弥呼の墳墓には鳥居と社があったとしてそれを墓域に入れるとそれなりに大きいだろう。また、かなりの数の殉葬者を埋葬したところも含めれば、墓域に径百余歩という表現が成り立つかもしれない。ひょっとすると、熊野神社のあたりはその表現に適合できる墓なのかもしれない。

もとへ、こういう水準の推測の積み重ねはしばしば誤るから、この段落の卑弥呼の墓についての推測は用心して取り消しておこう。須玖岡本周辺に卑弥呼の墳墓にふさわしいところがほかにある可能性も排除できない。歴史学にとって重要なのは、卑弥呼の墓を見つけることよりも、倭国史の整合的な理解に到達することである。

iv. 弥生時代の列島西部の概観

A：邪馬壹国を盟主とする連合体の状況

本書が考察してきたのは『三国志』「魏書、烏丸鮮卑東夷伝」の一部にすぎない。その「倭人伝」は短いとはいえ、倭人の社会を知るのに有用なもっとさまざまな情報を記している。だが、それを考究する力量がわたしにはない。この第iv節で、弥生時代の倭人の社会について概観だ

けでも得る努力をしよう。倭国史を通観しようとするとき『三国志』「東夷伝」から受けとるべきメッセージで、まだ残っている重要なのは次のことだと思う。

朝鮮半島南半の韓は地域性をもっていて三つに区別でき、帯方郡の南に位置する黄海側の馬韓は 50 余国に、南部海峡沿いの弁韓は 12 国に、その北側日本海側の辰韓も 12 国に分かれている。漢から魏にかけての直轄地に近く文物が流入して先進の中国文明の強い影響下にあった三韓でさえ、まだ多くの部族共同体的な小さな地域が分立する状態にあった。朝鮮半島南岸から対馬までの 60km 近くの海峡は 36km 程度のドーバー海峡よりも幅が広く、九州島までなら 200km 近くもある。そういう地理的な条件下でまだ発展途上にあった弥生時代、九州島さらに遠い近畿地方まで広がる広域に、三韓よりもはるかに統合化された国家ができていたとする歴史観はそもそも成り立ちがたいだろう。

『三国志』「倭人伝」に基づいて本書が得た弥生時代の倭の描像は、九州北部で部族的な共同体（国）がかなり統合化された 30 国ぐらいの連合体に発展し、その盟主となった大国邪馬壹国の首長が魏から倭を代表する王と認定され金印を授けられた、というものであった。帯方郡に派遣された使節は邪馬壹国内の有力者とほかの有力な共同体の代表かだろうが、その人たちも魏の位階を授けられた。すでに後漢の時代に金印を授けられた王家の権威は卓越していたと想像できるが、まだそれぞれの小共同体の自立性は尊重されていたと考えられる。

重要なのは、『三国志』が、邪馬壹国の主導する“連合王国”と南隣の強国狗奴国との戦争状態を記し、南の大国投馬国のことにも触れて、九州島全体がまだ統合されていなかったことを教えることである。『三国志』は、九州島よりも東方のことにも触れるがその記述は漠然としていて、邪馬壹国を盟主とする連合体が九州島外の列島西部にどれだけの影響力をもっていたかを語らない。

それなのに、現行主流の歴史家や考古学者はたいてい、列島西部がほぼ統合化されていたかのように考え、その考えにもとづいて歴史理解を語る。この方法は、奈良盆地の王家が「天の下」を統治していたと主張する『記・紀』の呪縛から自由ではない、と思う。日本古代の歴史を頭のなかで組み立てようとして、論拠をおろそかにして、『日本書紀』を読みこみすぎるからではないだろうか。科学的方法に則る歴史家は禁欲的でなければならない、と自然科学者の端くれだった筆者は思う。

列島西部のほかの地域の状態に関心を向ける前に、次章に備えて、卑弥呼の時代の九州島の倭人社会がどのような方向に進もうとしていたか動向を考えてみよう。『三国志』は、韓や倭など諸地域が鉄材をはじめさかんに物資を交易していたと記す。鉄材は鋭利な兵器を製作するのに用いられ、戦いのあり方を苛烈なものにし、部族的な共同体間の争いは勝敗を決するような戦争に変化したと想像できる。その戦争は全般的な文明化の進展のなかで起き、敗者が勝者に従属する関係をもたらしただろう。つまり、倭人の広域な社会は統合化される方向に進んだと考えてよいだろう。

卑弥呼の女王国は南隣の狗奴国と戦争状態にあった。女王国を盟主とする連合王国の魏との外交は、もちろん連合体の富の追求だったはずだが、同時に、伊都国から朝鮮半島南岸までのシーレーンを強固にし、対立する南隣さらに九州南部へ勢力を拡大する安全保障上の構想に沿ったものだったと考えられる。倭国の帯方郡への使節の派遣は、魏軍が黄海の渡海作戦で帯方郡を確保したばかりのタイミングであったことが、その状況を示唆する。

卑弥呼が亡くなると大きな墳墓を造ったという記述も、時代が新たな状況に進んでいたことを物語る。卑弥呼の後継者をめぐって対立が生じたことが語られるが、まもなく十三歳の宗女が王に立てられた。宗女という語は、卑弥呼と血縁で王家に連なる少女であることを意味す

るだろう。二代続けての女性王は、政治状況が 600 年代中ごろの新羅に似ていたことを示唆する。当時の新羅は隣国高句麗と百済との戦争状態にあり、次の文武王は唐軍の侵攻にうまく対応して朝鮮半島の統合を成し遂げた。邪馬壹国も同様の状況に対処していたと想像できる。

こうした状況を、九州島だけでなく東の本州・四国などの列島西部を含めた倭が、後続する古墳時代への過渡期にあった、ととらえることが許されるだろう。

B：弥生時代の奈良盆地の文明度

現在、考古学者から邪馬壹国の女王卑弥呼の墓が奈良盆地にあったという考えが発表されると、主流の歴史家もそれを黙認することが起きている。この考え方に本当に実証的な根拠があるのだろうか。この B 項ではそれを考えてみよう。

奈良盆地の代表的な弥生遺跡として唐古・鍵遺跡の名が高い。発見されてまもなく 1901 年に報告が発表され、以来長く調査研究が行なわれてきた。戦前まで『記・紀』がおおよそ歴史の真実を語っていると考えられているなか、考古学的な発見もその証拠を示しているという考えで研究が進められたと思われる。次に要約引用する Wikipedia「唐古・鍵遺跡」の記述にもその思考法が影を落としているかもしれない。先入観にとらわれず公平を期して、Wikipedia に書いてあることを少し長くなるが遺漏のないように要約して、本章の第 iii 節 B 項の記述の様式で書こう。

唐古・鍵遺跡

この遺跡の特徴のひとつは、弥生時代を通じて全期間の遺物が出土することである。特に大量に出土する弥生土器は、大和様式弥生土器編年としてまとめられ、考古学で近畿地方の標準的な土器編年に位置づけられている。遺跡は北・西・南・中央の 4 区に分けられ、面積は約 $30 \times (100\text{m})^2$ 。以下の 5 段階に分けて記述されている。

第1段階 初期（弥生時代前期初頭から前半）

この時期の土器は弥生土器の古い型式と縄文土器の晩期の型式が共伴する。

第2段階 弥生時代前期後半から中期初頭

未完成の木器貯蔵穴が検出され、農耕具や斧などの工具・高杯などの容器類が出土している。総柱の大型建物跡が検出され、柱の伐採時期は炭素年代測定法により紀元前 5 世紀ごろのものと、紀元前 4 世紀から 3 世紀のものという結果が示されている。同時期の墓として木棺墓や方形周溝墓が検出されている。木棺の炭素年代測定では 2100 年前との結果が得られている。

第3段階 弥生時代中期前葉

周囲に環濠、集落が繁栄した時期とされる。最も外側の環濠の全長は 2 km に達すると推定される。中期初頭と考えられる梁行 6m×桁行 13.2m の総柱の大型建物跡が検出されている。検出された柱は炭素年代測定法により紀元前 4 世紀から 3 世紀との結果が得られた。南地区には鑄造関連遺物が出土し青銅器工房があったと推定される。工房が展開したのは中期末から後期初頭にかけてと推定され、炉跡を中心に鑄型などが出土している。この時期の墓は、集落外縁部に土壙墓、あるいは甕を転用した小児の墓が検出されている。中心となる成人用の墓域は集落から離れた場所に作られたと推定されている。集落の人口に見合う規模や権力を象徴するような遺物は無く、確定できていない。

第4段階 弥生時代後期

集落が被災・再生・発展した時期。環濠は弥生時代中期末の洪水で埋没するが、後期初頭には再掘削が行われて復活。大半の環濠は後期後半に大量の土器の投棄によって埋められている。最後の環濠も弥生時代終末期に埋められて、環濠は消滅した。弥生時代後期の

土器が多数検出されている。また、集落内に方形周溝墓が作られるようになった。

第5段階 弥生時代終末から古墳時代前期

大環濠帯が消失した時期にあたる。集落は存続していたと考えられる。ただし出土する土器では、古墳時代最初期の庄内式甕^{かめ}は顕著ではなく弥生形甕が中心となっており、同時期に繁栄した南東部の縄^{まきむく}向遺跡などとは様相が異なっている。また、弥生時代中期から後期の環濠が再掘削され、古墳時代前期に環濠集落が復活したと考えられている。

大量に出土するのは弥生土器

石器は製品のみでなく原料や未成品が出土し、集落は石器製品の生産地であったと考えられる。

木製製品も未成品が見られ、弥生時代全期間を通して木器生産が行われていたと考えられる。

紡績具も多く出土している。機織り技術は弥生時代に大陸から伝来したものと考えられ、弥生時代中期初頭とみられる織布の断片が発見されており、大麻を用いた平織り布が存在したことが明らかになった。

金属器としては青銅器と青銅器の鑄造に関わるものも出土している。

青銅器は弥生時代中期初頭の細形銅矛が最も早いが、これは朝鮮半島もしくは北部九州からもたらされたと考えられる。次に古いのは、銅鐸を模した土製品である。その他、弥生時代後期の銅鏃・銅釧・巴形銅器・小型仿製鏡・有孔円盤などが出土している。鑄造関連遺物としては、弥生時代中期中頃の銅鐸の石製鑄型と鑄造失敗品と考えられるスクラップされた銅鐸片が最も古いと推定されるが、最も鑄造が盛んだったと考えられるのは、青銅器鑄造編年の第Ⅱ期から第Ⅲ期（弥生時代中期末から後期初頭）の土製鑄型によ

って大型青銅器が製造された時期で、南地区からは大量の土製鋳型が出土している。なお、鉄器の出土は僅かで、弥生時代後期後半の鉄斧と、古墳時代前期のヤリガンナなどが見られる。

装身具としては、ヒスイが7点出土している。特に注目されるのが、2点のヒスイ製勾玉である。その他には、水晶玉・ガラス小玉・牙製垂飾品などが出土している。また、未完成の碧玉製大型管玉やこれを加工する玉砥石などが出土しており、集落内で装飾品の加工が行われていたと考えられる。

このあとに、重要文化財に指定された出土品の三つの箇条書き

- 1 土器・土製品 803 点・木器・木製品 203 点・石器・
石製品 633 点・鑄造関連遺物 134 点・金属製品 19 点・
ガラス製品 34 点・骨角牙製品 83 点、ほか
- 2 壺形土器 34 箇・甕形土器 5 箇・鉢形土器 3 箇・
高坏形土器 2 箇・水差形土器 1 箇・蓋形土器 10 箇・
土器片 一括・石器 46 箇・骨角牙器 7 箇、ほか
- 3 壺形土器 28 箇・甕形土器 3 箇・鉢形土器 1 箇・
高坏形土器 1 箇・水差形土器 4 箇・器台形土器 2 箇・
蓋形土器 1 箇

高名な遺跡からの出土物を初めて丁寧に見て、青銅器や鉄器の出土の少なさに驚いた。かつて近畿中心に分布すると言われていた銅鐸さえ破片しか記載されていない。気になって銅鐸出土地を調べたら、奈良県からの出土は周辺県よりも少ないことが分かった。土器・木製品・石器・紡績具やヒスイ勾玉・ガラス製品が丁寧に述べられているが、出土物においてほかの地域よりも卓越しているとは思われない。木棺墓や方形周溝墓が検出されていると書かれているのに、墓の構造や副葬品について述べないのはなぜだろうか。その書き方からすると、大量の出

土品が副葬されていた九州北部の四つの遺跡に匹敵するほどではなかった、と推測される。

この遺跡から大量に出土する弥生土器が、近畿地方の標準的な土器編年に用いられているのだが、文中に二三しか現われないが、建物の柱や木棺の¹⁴C年代測定法による年代との整合性が十分に検討されたのか述べられていない。五段階に分けられた時代分けの絶対年代が、九州の時代分けと整合的なのかにも疑問が残る。九州の遺跡では、甕棺墓・巨石下甕棺墓・木簡墓と年代的な変遷が見られ、甕棺の埋葬から墳墓に大型化するあとも見られるのに対し、長い期間にわたるといって唐古・鍵遺跡での墓制の変遷についても記述されていない。集落の環濠も、水稻栽培初期の九州の板付遺跡ですっと以前に現われていたし、吉野ケ里遺跡の環濠の規模を上回るとも思えない。

考古学に疎い門外漢の判断だが、奈良盆地を代表するこの弥生遺跡が、九州北部の多くの遺跡を圧倒するという証拠は挙げられていない。少なくとも、全体的に見た文明度の点で、唐古・鍵遺跡が代表する奈良盆地が九州北部やそのほかの地域を圧倒するほどだったという証拠は乏しい、と言わざるをえない。

われわれは、邪馬壹国九州説と邪馬壹国近畿説とが成立するための必要条件が非対称だということに気づかなければいけない。邪馬壹国九州説に必要なのは、両地方の考古学的な遺跡調査を比較して、奈良盆地が九州北部を圧倒するほどの文明度を誇っていたのではないことを確認するだけである。本書の見解は、九州北部に邪馬壹国を盟主とする30国ぐらいの連合国が列島で先進的な地位にあり、その内部の伊都国に一大率を置いて朝鮮半島南岸までの交易路をおさえてにらみを効かせ、朝鮮半島に帯方郡を設置した魏に使者を送って外交関係を結んだ、というものである。この見方は、その連合国がほかの地域を従属させる

ほどの勢力をもっていたことを必要条件としない。それに対して、邪馬壹国が奈良盆地にあったとする説は、奈良盆地の勢力が九州北部までの地域を従属させ、九州北部の伊都国に一大率を置いて朝鮮半島まで影響力を及ぼすほどであったとする条件を必要とする。その場合、奈良盆地の勢力は瀬戸内海から朝鮮海峡に達する長大なシーレーンを維持する海兵隊を組織するほど強大であったと想定しなければならない。

『三国志』「東夷伝」が客観的に記述する当時の時代状況からして、どちらの理路が合理的であるかは明らかだろう。『三国志』「東夷伝」は、韓や倭の現地を巡視した魏使が観察して記録した文書が転載されたものにちがいないが、邪馬壹国という研究の対象を提示するその『三国志』「東夷伝」は、韓も倭の地域も基本的にまだ諸共同体が自立性を保っている状況にあると報告している。邪馬壹国についての研究はそれに反する論を立てることはできない。奈良盆地に卑弥呼の墓を見出そうとする研究は最初から無理なのである。

考えてみれば、邪馬壹国が九州にあったか近畿にあったかの論争が長く続いた原因は、暗黙のうちに列島西部がすでに統合されていて一方が他方を従属させていたと前提したからである。しかし上で論証したようにその前提を取り払ってみれば、二つの説が必要とする条件は対称ではなかった。邪馬壹国が九州にあったとする見方の要件が低く、『三国志』「東夷伝」のすなおな読みはこちらを支持しているのである。「女王国の東、海を渡る千里、また国あり、皆倭種なり」という文は、「九州島にある女王国の東へ海を千里行くとまた国があるが、住民はみな倭人だ」と解釈するのが最もすなおな読みである。魏の一行が乗ってきた船が伊都国に停泊したままであったと考えるのは怠慢だろう。あれほど陸上を進んで国情を知ろうとした一行が、すぐ近くの地勢的に重要な博多湾を船から観察もせず、女王国からさらに東にある要衝関門海峡まで行ってみる関心を示さなかったのだろうか。

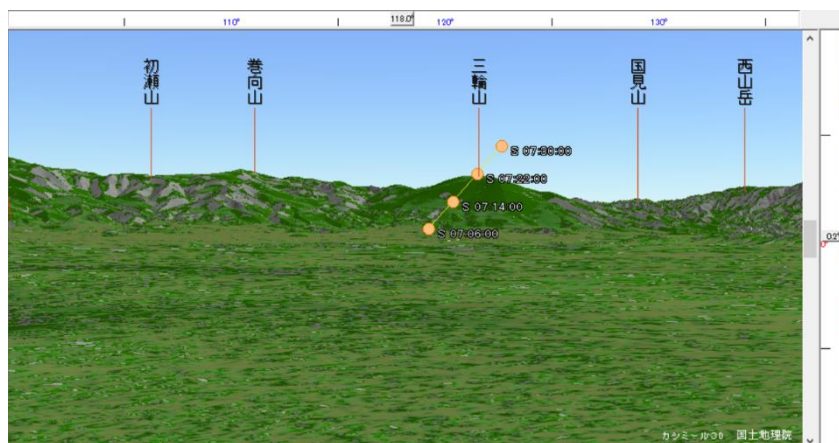
さて、以上の論証でこの第V章は終局に至った。けれども「太陽の道」の視点はもう一点つけ加えることを可能にする。それは、唐古・鍵遺跡の考古学的研究成果を見棄てる必要がないということである。前著⁽¹⁾でも奈良盆地にも「太陽の道」崇拝があっただろうということを考察したが、そのときは地図と緯度の数値で議論することしかできなくて、明快な結論を下すことができなかった。ところが本書では、ソフトウェア「カシミール 3D」の描く画像を用いてさらに突っ込んだ議論ができるようになった。その議論をつけ加えよう。

唐古・鍵遺跡の中心点は地理院地図が三点のマークを置く唐古池の南として、カシミール 3D を用いて、東方の山並みがどのように見えるか、二至二分の日の太陽がどの峰から昇ってくるか描いてみよう。真東にカメラを向けて春分秋分の日の出を描いたのが、図V.7 である。龍王山はこの地域で目立つ山だが、春分秋分の標識となる山とまでは言いにくい。それでも、秋分の日を過ぎてまもなくとり入れの時期だと知らせる役割は果たしただろう。夏至の日を出を描いても、明確に標識と見なせる山は見つからない。



図V.7 唐古鍵遺跡から春分秋分の日の出を見る

ところが、冬至の日の出を描かせると、ぴったりの山が見つかる。奈良盆地の東方の山並みのなかで西側に突き出て単独峰のように目立つ三輪山である。それを図V.8に示そう。唐古・鍵遺跡から見ると、冬至の日の太陽はちょうど三輪山の頂上から顔を出すのである。つまり、唐古・鍵遺跡を残した共同体は、冬至の日の出がそのように見える場所を中心に築かれた、とすることが可能である。



図V.8 唐古鍵遺跡から冬至の日の出を見る

前著⁽¹⁾では、カシミール 3D の図を使えなかったけれども、もう少し複雑な議論をした。その議論は、北條芳隆の大阪平野の古墳は図V.7の龍王山の北寄りの520mの峰(北緯34.5655度)をめざしているとする論文⁽⁴⁴⁾と関連している。唐古・鍵遺跡は北緯34.5690度にあり、その東方の龍王山の北寄りの522mの峰のふもとは古墳時代に属すが^{ふすまた}衾田陵(34.5687度)がある。弥生時代のものとしては、『日本書紀』が、第7代孝靈王の宮がおおよそ唐古・鍵遺跡の西方(34.5896度の地点)にあると記している。さらに、初代神武王が宮を置いたとされる^{うねびやま}畝傍山を太陽の道の中心と見なすと、おおよそ夏至の日の出の方角に三輪山と^{まきむくやま}巻向山がある。この議論はもっと深めることができるだろう。

唐古・鍵遺跡の共同体の始まりは、第IV章第ii節の図IV.1 で示した『日本書紀』に記載される王たちの推定年代よりも古いと考えられるから、奈良盆地でも、紀元前の古い時代から九州北部と似た「太陽の道」崇拝があったと考えることができる。水稻栽培を奈良盆地にもたらし、人々が、直接ではないとしても九州の方から稲の^{もみ}籾といっしょに「太陽の道」崇拝をもちこんだと考えることができる。

『日本書紀』の記述は、こういう考え方と矛盾しない。それどころか初代王は九州から来たと書く。そして、第I章で議論したように『記・紀』神話の神々が九州北部の「太陽の道」の神社で祀られる神々であり九州生まれと考えられることから、『日本書紀』の記述を無視してはいけないだろう。以前、『日本書紀』の2代～9代王までの記述は単純すぎる、『日本書紀』の編者たちの創作である、とする主張がなされたけれども、その主張のようにむげに切り捨てるのは考えものである。

『日本書紀』が第7代孝靈王の妃が^{しきのあがた}磯城郡主の娘と書くことは、孝靈王の宮が唐古・鍵遺跡の西方にあったとされることが結びつけられ、興味深い解釈が可能である。畝傍山の地域の首長が、婚姻関係によって磯城地域つまり唐古・鍵の共同体との関係をつくった、それが、10代～12代王がその地域へ進出する契機となったと解釈することができる。『日本書紀』の記述を考古学的知見と関連づけることが可能なのである。こういうわけで、太陽の道の視点をもっと展開すれば、奈良盆地の古い歴史に切り込むことができるかもしれない。今後の研究を俟ちたい。

付記

岩波文庫『魏志倭人伝』は卑弥呼の魏への景初二年(238年)六月の遣使を三年の誤りとするが、『三国志』「魏書明帝紀」が、「二年春正月、司馬宣王(司馬懿)に遼東を討つ詔が出された」とし、「景初二年八月に、司馬宣王が公孫淵を襄平に囲み之を大破す、淵の首を京都に伝え、海東諸郡を平げ

た」と書くから、遣使が景初二年であっておかしくない。そこに、「帝曰く、四千里征伐、奇を用いる…」という記述が続く。奇を用いるというのは、「東夷伝」序文が「景初中、大いに軍旅を興し公孫淵を誅し、また軍を潜めて海に浮かび、楽浪・帯方を収めた」と書く渡海作戦のことだろう。陸を進んで現代の遼寧省に入った司馬懿の本軍のほかに、別動隊が海を渡ってすでに六月には楽浪・帯方郡を接収していた可能性がある。旧暦八月は秋である。海を渡る奇襲作戦は本隊が遼東に到着する前、海の穏やかな旧暦六月以前に行なわれた可能性が高い。十二月に明帝が病気で床に就き、景初三年正月、司馬懿が遼東から帰還すると明帝は亡くなった。天子との面会を希望して帯方郡の太守から京都（洛陽）へ送り出された倭の使節の帰国は景初三年(239年)のことだろう（洛陽まで行くことを望んだのは、後漢のときそうして金印をもらった前例に倣おうとしたものと考えられる）。

「四千里征伐…」は、四万の軍勢の遠征が布告されると廷臣が戦費がかかりすぎると異論を出したのに対し、明帝の「四千里の征伐に向かうのだから、奇策を用いるとはいっても、軍事力に頼るべきであり、戦費を安く上げようとしてはならない」（ちくま学芸文庫本『正史 三国志1』の訳文）という返答に出ることばである。この文の前の註に、晋の時代の書物を引いて、何曾という人物の次のような上奏文が引用されている。「歩兵・騎兵数万の行く手の道は曲がりくねって険しく、四千余里の行程である。予期できないことに対策を講じて副将を置くべきである…」。この文脈で四千里は、長距離を飾ることばではなく、名目的に臣従してきたが実力で平定したことのない遼東への遠征軍の派遣で、実際に危険のある征路を表現しているとするのが適切だろう。1里 $\approx$ 400里では1600kmにもなって、安全な魏の領分から外の遼東への距離の表現として誇大すぎる。1里 $\approx$ 70m 余りとすれば、ここの記述は、「東夷伝」の中国東北部から朝鮮半島へかけての距離の記述とバランスがとれる。「帝紀」と「東夷伝」との距離把握は一貫しているのである。

参考文献

- (1) 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.
- (2) 小川光三『大和の原像—知られざる古代太陽の道』, 大和書房, 1985 年.
- (3) 水谷慶一『知られざる古代』, 講談社現代新書, 1980 年.
- (4) 杉本智彦『カシミール 3D GPS 応用編』, 実業之日本社, 2014 年,
最新版ソフトウェアはインターネット上のホームページ.
- (5) 谷川修 電子書籍『日本神話の起源と変遷』, 白江庵書房, 2022 年.
- (6) 小林健彦「新羅国の文武王と倭国」, 新潟産業大学経済学部紀要, 第 43 号,
2014 年.
- (7) 服部英二『転生する文明』, 藤原書店, 2019 年.
- (8) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「85 ボロボドゥール寺院の太陽の道」, 2019 年.
- (9) 井澤毅「遺伝子の変化から見たイネの起源」, 日本醸造協会誌, 112 巻 1 号,
2017 年.
- (10) Shinichiro Honda ホームページ「アワ, キビの起源」, 2020 年.
- (11) Xuehui Huang, Nori Kurata, *et al.* A map of rice genome variation reveals
the origin of cultivated rice, *Nature* 490 (2012), pp.497-501.
- (12) 倉田のり, 久保貴彦 <http://first.lifesciencedb.jp/archives/> 6065, 2012.
- (13) 谷川修 <http://hakkooan.net/>蝶の雑記帳, 「38 鶺鴒と稲作の伝来」, 「38b
稲作と鶺鴒をもたらした人々のお歯黒」, 2016 年.
- (14) 谷川修 電子書籍『稲はどこから来たか 気候地理学的な推論』, 白江庵書
房, 2022 年.
- (15) Shinichiro Honda ホームページ「イネの起源 1」, 「イネの起源 2」, 2018 年.
- (16) S. A. Marcott *et al.* A Reconstruction of Regional and Global Temperature
for the Past 11300 Years」, *Science* 399 (2013), pp.1198-1201.
- (17) Wikipedia「海水準変動」, <https://ja.wikipedia.org/wiki/海水準変動>
- (18) 近藤純正「1993 年の大冷夏」, 天気(日本気象学会), 41 8, 1994 年.
- (19) J. L. バック, 「Land Utilization in China」, 1937 年.

考え方だけの孫引き。

- (20) goo ブログ 地理講義 32 中国の農業 農業地図, 2011 年.
- (21) <https://j2.wikipedia.org/wiki/ケッペンの気候区分>
- (22) 宮本一夫ほか「東北アジア農耕伝播過程の植物考古学分析による実証的研究」, 九州大学学術情報リポジトリ.
- (23) 原宗子「古代黄河流域の水稲作地点」, 流通経済大学 創立五十周年記念 論文集 1, 2016 年.
- (24) Robbeets M., Bouckaert, R., Conte, M. *et al.* Triangulation supports agricultural spread of the Transeurasian languages, *Nature* 599 (2021), pp.616-621.
- (25) 藤尾慎一郎『日本の先史時代』, 中公新書, 2021 年.
- (26) 李亨源「韓半島の初期青銅器文化と初期弥生文化」,
(日本の)国立歴史民俗博物館研究報告 第185集, 2014年.
- (27) 後藤直「朝鮮半島原始時代農耕集落の立地」, 第四紀研究33(5), 1994年.
- (28) Yim Yang-Jai & Kira T., 日本生態学会誌 1975年, (図だけの孫引き).
- (29) 佐藤洋一郎『稲の日本史』, 角川ソフィア文庫, 2018 年.
概略を「JAICAF お米のはなし 12, 14」で知ることができる.
- (30) 国際気象海洋株式会社ホームページ.
- (31) 中村大介「弥生時代の開始：朝鮮半島から日本列島へ」, かながわの遺跡展特別講演第2回.
- (32) 可児弘明『鵜飼』, 中公新書, 1966 年.
- (33) ファン ハイ リン 「お歯黒文化圏に関する試論」, シリーズ ベトナムシンポジウム 2013, 2013 年.
- (34) 原三正『お歯黒の研究』, 人間の科学新社, 2006 年.
- (35) 周達生 「中国の高床式住居」, 国立民族学博物館研究報告,
巻11 4号, 1987年.
- (36) 浅川滋男 「中国の民家・住居史研究」, [https://www.jstage. go.jp/ article](https://www.jstage.go.jp/article).

- (37) 「土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム」ホームページ.
- (38) T. Izawa Reloading DNA History in Rice Domestication, Plant and Cell Physiology, pcac073, 03 June, 2022年.
- (39) 井澤毅 「イネが光周性花芽形成のモデルって本当ですか?」, 時間生物学 Vol. 25, No. 1, 2019 年.
- (40) 古田武彦 『邪馬台国はなかった』, 朝日新聞社, 1971年.
- (41) J. ダイヤモンド 『昨日までの社会』, 日本経済新聞出版, 2013年.
- (42) 原田大六 『平原弥生古墳』, 葦書房, 1991年.
- (43) 前原市教育委員会編 『平原遺跡 前原市文化財調査報告書 第70集』, 1999.

2024 年 9 月秋分

海蝶 谷川修

